

ドイツ社会文化論としての映像メディア・アーカイブズ

(1) 2001年：新世紀において人間は進化するか

吉 田 和比古

本稿は、2001年から2004年にかけて執筆した「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ(1)~(6)」の続稿であるが、論文題名を上記のように変更した理由は、録画される映像の媒体（メディア）が従来のVHSビデオテープからDVD（デジタル・ビデオ・デスク）に変換しつつあるからである。20年前の録画テープがすでに画質劣化の状態にある現実を考慮すると、当面はDVDの持つ画質特性に依存することになると思われるが、将来的には、さらに別の媒体に変わるかどうか、現時点では未知数である。

ま え が き

「20世紀は、南極大陸を除いて地球の全地表面を国家が覆いつくした初めての世紀だったといわれる。たしかに20世紀は国家が社会の全領域に介入することになった世紀である。そして国家は19世紀から20世紀にかけて、特定の民族に支えられた国民国家に変貌していった。しばらく前までは、日本を含めて世界中のどこでも国民国家についての信頼が揺らぐことはなかった。しかし、20世紀も1980年代末あたりからソ連や東欧を中心に民族紛争が激しくなり、民族と国家、その二つを結び付ける国民といった観念に対する信頼感が揺らぐようになった。21世紀に入っても、地球上を揺さぶりそうなナショナリズムと民族問題。我々はこの問題にどう向き合

っていくべきか」 「21世紀の世界史～新しい歴史の構図～」 [2001年2月27日・『歴史で見る世界』・ETV・30分]

上記引用文章の後半に、かすかに響いている不協和音は、2001年に起きた人類史上まれに見る事件で現実のものとなった。2001年9月11日、アメリカで起きた『同時多発テロ』を我々はメディアを通して体験することになる。

2001年 [平成13年]

432. 「アインシュタインの苦悩～第二次大戦と原爆開発～」 [2001年1月8日・『教育セミナー：歴史で見る世界』・ETV・30分]

第二次世界大戦の開戦は、短期的には1939年9月に勃発したナチス・ドイツ軍によるポーランド侵攻とそれに伴う英仏の対独宣戦にあった。しかし、より長期的には、第一次世界大戦のヴェルサイユ条約で戦争の責任をもっぱらドイツに負わせ、「天文学的」な賠償金を押し付けたため、ナチズムの台頭を招いたことにあった。その上、1929年の世界恐慌の勃発は、不況長期化の原因となり、世界経済のブロック化が進む。1933年に政権を掌握したヒトラーは、自らの政敵を一掃し独裁体制を樹立する。とくにヒトラーはヴェルサイユ体制を無視して再軍備を強行し、1938年にはオーストリアを併合、翌年の1939年にはソ連と不可侵条約を締結した上で、ポーランドに侵攻し、こうして第二次世界大戦が始まった。1916年に「一般相対性理論」を発表し、1921年にノーベル賞を受賞したアインシュタインは、ユダヤ人の解放や国際連盟の文化活動に協力するなど第一次世界大戦後の国際平和維持に強い関心を示した。しかし、ヒトラー政権の成立後はアメリカに移住した。1939年12月ドイツで核分裂が実証されると、危機感を抱いた彼は1940年8月に時のアメリカ大統領ローズヴェルトに原爆開発を進言した。その結果「マンハッタン・プロジェクト」と呼ばれる巨大計画が始まり、やがてアメリカは1945年7月

に原爆実験に成功した。しかし実際の使用に当たってはソ連との無制限の核開発競争を避けるため、実験的な投下を提案した一部の学者の主張は無視され、原爆は無警告で1945年8月、広島と長崎に投下された。原爆は歴史上初めて実戦に使用された。そのためアインシュタインらの物理学者たちは深い挫折感を味わい、戦後は積極的に核廃絶を主張していくことになる。その後、冷戦の終結に伴い、戦略核兵器の削減などが進んだが、インドやパキスタンの核保有、イラク、北朝鮮などによる原爆開発が世界情勢の不安定要因となり、現在に至っている。

433. 「ベルリン・フィルと6人のバシストたち」〔2001年1月8日・『クラシック倶楽部』・BS2・60分〕

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコントラバス奏者による来日演奏会。出演：クラウス・シュトール、エスコ・ライネ、マルティン・ハインツェ、ヴォルフガング・コーリー、ペーター・リーゲルバウアー、ウルリッヒ・ヴォルフ。〔2000年11月24日、紀尾井ホール〕この演奏会は、ベルリン・フィルの第一コントラ・バス奏者クラウス・シュトールを中心に、いずれもベルリン・フィルのメンバーでアル6人のコントラバス奏者によって開かれたユニークなコンサートである。ステージの上で6人の奏者がそれぞれコントラバスを抱える姿は、それ自体で視覚的に圧倒的な存在感を示し、繊細にしてかつ重厚で骨太な独自の音の世界を展開している。

434. 「大いなる遺産を生かして～ドイツ・古城イベントコーディネーター～」〔2001年1月10日・BS1『ヨーロッパアンライフ』・20分〕

ドイツ西部にあるナメディ城に住むハイディ・ホーエンツォレルンさんは、損壊した城の修復をひとりで行っている。結婚式やクラシックコンサートなど、イベント会場として城をよみがえらせたハイディさんを紹介する。

435. 「戦後補償」〔2001年1月11日・ニュースBS23：シリーズ・21世紀のルール(3)』・BS1・20分〕

戦争の世紀と呼ばれた20世紀、被害者の大半は非戦闘員の一般市民だった。しかし、その多くの人たちが戦争の補償を受けることはなかった。一方、20世紀後半からさまざまなケースで、訴訟が繰り広げられるようになっていく。この訴訟社会の中で、戦争で被害をこうむった個人が、その加害国や関係団体に補償を求めて訴訟を起こす動きが活発化してきた。番組では20世紀に未解決だった戦争の補償問題が、21世紀にどのように受け継がれていくのかを考える。戦争による補償の問題は、現在国家間の賠償の問題として扱われている。この考え方は、20世紀の初頭、第一次世界大戦後の『ベルサイユ条約』(1919年9月)のときから始まる。それ以前の考え方は、単に戦勝国が敗戦国に対し勝った見返りで、金銭や土地を求めるといった単純なものだった。しかし、ベルサイユ条約の締結の場で、アメリカのウイルソン大統領が初めて『賠償(reparation)』という言葉を用いるようになる。戦争を引き起こした国が損害を補償する責任があるという考え方が始まった。これを受けて戦争の賠償は、敗戦国が戦勝国に支払うという形になり、個人がこうむった被害を国家が補償するということはなかった。たとえば、ベトナム戦争の場合など、アメリカとベトナムは和平協定を結んだが、枯葉剤などの後遺症に苦しむベトナムの人々について、アメリカが補償に応じる動きはない。また日本では、太平洋戦争中の強制労働や「従軍慰安婦(comfort women)」などの問題に対し、補償を求める裁判は後を絶たない。日本政府は、サンフランシスコ条約はアジア各国の二国間協定によって、太平洋戦争の賠償問題は解決済みという見解をとっている。また日本の裁判所も、個人が直接相手の国に賠償を求めることはできないとして、これまで訴えを退けてきた。最近ドイツでは、戦争の賠償は国家間の問題というこうした常識がくつがえる動きがでてきており、ナチスの時代に企業などで強制労働をさせられた犠牲者に補償しようという『個人補償』の試みが進められている。現在も生存している100万人とも言われる犠牲者にどのように「個人補償」をしようとしているのか。

現在ドイツでは戦争補償は、戦争の法的責任を認める立場からではなく、道義的立場から、企業と政府の出資により作られた財団が行っている。きっかけは、アメリカにおいて次々と起きた賠償訴訟や、ドイツ製品の不買運動など、ドイツの経済を脅かす動きが生じたことにある。こうした動きには、いまだにナチス・ドイツから受けた迫害を許そうとしない特定の民族集団の強い意思が働いているということも想像される。番組では、ドイツにおける「記憶と責任・未来」と名づけられた財団の活動やその仕組みについて詳しく解説する。ドイツからのレポートはベルリン支局長・二村伸。

⇒関連映像資料：470. 「56年目の償い～ドイツ・強制労働の被害者たち～」〔本稿69ページ参照〕

⇒関連映像資料：471. 「過去を問われたドイツ企業～強制労働・56年後の償い～」〔本稿71ページ参照〕

436. 「世界くらしの旅：ベルリン」〔2001年1月14日・『教育セミナー・世界くらしの旅』・ETV・30分〕

番組の講師である内藤正典氏（一橋大学）は、2000年12月ゼミの学生を伴って変貌めまぐるしいベルリンを訪ね、そこで暮らす人々にビデオ取材を行った。統一後もなお続く東西の経済格差の問題と、トルコ人を中心とする外国人労働者とその家族、そして地域紛争による難民となってドイツに流入する外国人とのあつれきの実態を学生たちは目の当たりにしながら、異文化との共存はドイツのみならず、日本の問題でもあることを認識する。

437. 「アルフリート・クルップ」〔2001年1月14日・『100人の20世紀』・NT21<テレビ朝日系列>・30分〕

1948年7月31日、ドイツの戦争犯罪人を裁くニュルンベルク後続裁判で、「12年の禁固刑および全財産の没収」の判決を受けた一人の実業家がいる。アルフリート・クルップすなわちドイツの鉄鋼王、大砲王、そして兵器工場と呼ばれたクルップ社の5代目当主である。アルフリート

は、被告席で裁判の間終始無表情だった。アルフリートが裁かれた罪は「略奪」と「奴隷的使役」だった。クルップ社は第二次世界大戦中、ヒトラーが率いるドイツ国防軍が軍事的に占領した地域の設備や工場を接収して、大きな利益をあげた。さらに、労働力不足を補うため、戦争捕虜 (POW) や、外国人労働者、強制収容所の収容者など約10万人を劣悪な条件で働かせ、非人間的行為を行ったとされた。アルフリートは、最終陳述で「戦争という非常時に、私たちは何百万という前線・銃後のドイツ人と同様、ただ義務を遂行したに過ぎない」。クルップ社は、19世紀から鉄鋼業を営み、20世紀にかけての戦争の時代には大砲など兵器を生産して波に乗り、ドイツ企業の名門として、政権には不可欠の存在となっていた。クルップ社の特徴は、長子継承の個人会社にあり、巨大な企業を時の当主が全権を握る。アルフリートが5代目を引き継ぐのは第二次世界大戦中の、1943年。ヒトラーが兵器増産を叫んでいる時だった。裁判で連合国は、戦争がドイツ産業界とドイツ政府の陰謀であると結論付けたかった。そのため、ドイツ産業界のシンボリック的存在のクルップを槍玉に挙げた。禁固12年と全財産没収の判決は、勝利者の「みせしめ」刑として最大の効果を挙げたといえる。そしてそれはクルップ家の没落をも意味していた。ところが、時代は「冷戦」へと動く。「マーシャル・プラン」の導入によりヨーロッパの経済復興支援が始まる、その過程で冷戦対立は決定的となり、朝鮮戦争も始まる。この時アメリカが着目したのはクルップ社が持っていた「工業力」である。かつてヒトラーが必要としていたよう、アメリカは今度は対共産主義の戦争のために再びクルップのような「戦争ビジネスマン」を、そして敗戦国ドイツの工業力を必要とするようになった。ニュルンベルク裁判から3年後、1951年2月3日、アルフリートが収監されていたバイエルン州のランツベルク監獄の扉が開けられた。アルフリートは釈放会見でこう述べた。「私の人生は、私の意志だけではなく、歴史の歩みによって決定されてきた」。

⇒関連映像資料：

438. 「地獄に堕ちた勇者ども」 (“La caduta degli dei”, 1969年 伊＝スイス)

監督：脚本：ルキノ・ヴィスコンティ。第二次世界大戦中、「郵便配達は二度ベルを鳴らす」によって「イタリア・ネオ・レアリスマ [イタリア新現実主義]」の口火を切ったヴィスコンティ監督が、大戦前のドイツを舞台に、ナチズムによって富と権力を奪われていく「鉄鋼一族」の悲劇を描きながら、歴史そのものまで語りつくした集大成とも言える作品。モデルとなったのは、クルップ・ファミリーといわれている。ナチスが台頭し始めたドイツ・ルール地方に勢力を持つ鉄鋼王、エッセンベック家の集いの夜、当主が何者かの陰謀によって暗殺される。この事件を契機に起こる一族の跡目相続の骨肉の争いと、それによって漁夫の利を得ようとする陰險なナチス親衛隊の存在を描き出す。「ベニスに死す」に続くドイツ3部作 [1972年の「ルートヴィヒ 神々のたそがれ」で完結] の中間に位置するこの作品で、ヴィスコンティは、人間の愛憎と相克をデカダンスな映像美で浮き彫りにする。(155分)

439. 「ウィーンは私の夢舞台～一路真輝～」 [2001年1月14日・『N響アワー』・ETV・60分] 出演：一路真輝、司会：池辺晋一郎・檀ふみ。

「N響アワー」という息の長い番組の、21世紀最初のゲストは、元宝塚のトップ・スター一路真輝 (いちろまき)。現在、女優・歌手として活躍中の一路は、前年2000年ミュージカル「エリザベート」の主演で評判をとった。エリザベート (1837-1898) は、オーストリア＝ハンガリー帝国を支配したハプスブルク家のフランツ・ヨーゼフ I 世 (在位1848-1916) の皇妃で、シシーの愛称で慕われた美女であった。ウィーンの世界王宮の生活になじめずに、機会あるごとにヨーロッパ中を旅行していたが、スイスで無政府主義者に暗殺されるという悲劇の最期を閉じた。バイエルン国王ルートヴィヒ II 世とは従姉弟の関係に当たる。一路は、ウィーンの「アン・デア・ウィーン劇場」で、このミュージカルの中の曲

を歌った。この劇場は、かつてベートーベンが交響曲第三番「英雄」を初演したことでも知られる。ヴィスコンティの映画「ルートヴィヒ 神々のたそがれ」では、ロミー・シュナイダーがエリザベートに扮して出演している。

440. 「マーシャルとシューマン～米ソ冷戦とヨーロッパ統合～」〔2001年1月15日・『教育セミナー・歴史で見る世界』・ETV・30分〕

第二次世界大戦中のアメリカは、直接的に戦場になることを免れた上に、急速な軍需経済の拡大や原子力などの技術革新にも成功し、圧倒的な経済的優位を確立する。この経済的優位を背景をとして強いドルを中心とした、世界的規模での通商自由化体制の実現をめざすとともに、安全保障の面では「国際連合 (UN)」を創設し、米・英・仏・ソ・中の5大国の協調による平和の確保を構想していく (パックス・アメリカナ)。他方、第二次世界大戦中にドイツ軍との死闘で2000万人もの犠牲者を出したソ連は、ドイツの弱体化と東ヨーロッパの共産主義を露骨に求めたためアメリカと対立した。さらに、1947年3月にトルーマン大統領は戦争で経済的に疲弊したかつての植民地大国イギリスに変わって、ギリシアとトルコに軍事援助を与える「トルーマン・ドクトリン」を発表し、世界に対して自由主義か、共産主義かの選択を迫る。それから56年後の2002年アメリカ大統領ジョージ・ブッシュは、アフガニスタンに対する報復的空爆を開始するときにテレビを通じて世界に呼びかけた。自由主義国の側につくのか、テロリストの側につくのかと。アメリカの政策は絶えず二者択一であったし、今もまたその体質は変わらない。話を戻すが、当時モスクワでは戦勝国の外相会議が開催されていたが、ドイツ講和問題での対立が解けず、帰国したマーシャル国務長官はヨーロッパの経済復興が急務であると判断、同年6月に西ヨーロッパ援助計画として「マーシャル・プラン」を発表した。しかし、ソ連は参加を拒否したため、ここに来て米ソ対立は決定的となる。「マーシャル・プラン」でアメリカは、援助額を圧縮させるため、西ヨーロッパに側に共同計画

の立案にドイツの参加を強く求める。しかし、フランスのドイツに対する不信感は根強く、石炭資源の豊富なルール地方やザール地方のドイツからの分離を要求するまでになる。この独仏対立の緩和に大きな役割を果たしたのは両国の間に位置する小国ルクセンブルクで生まれ、フランスで育ち、ドイツに留学した経験の持ち主であるフランス外相のシューマンである。彼は1950年5月「ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体 (ECSC)」構想を提案し、西ヨーロッパ統合の布石が築かれた。ECSC は今日の EU の萌芽となる。

441. 「ミハエル・ゴルバチョフ」〔2001年1月21日・『100人の20世紀』・NT21<テレビ朝日系列>・30分〕

442. 「21世紀への証言：誤算なき未来へ ミハイル・ゴルバチョフ」〔1999年4月25日・BS1・30分、1998年4月25日の再放送・60分〕

1989年11月9日のベルリンの壁崩壊という大きな出来事に関して、旧ソビエト連邦の改革の立役者 M・ゴルバチョフの果たした役割の大きさは、あまり日本のメディアでは取り上げられていない。

443. 「ドイツ・故郷と異郷のはざままで～姜尚中～」〔2001年1月21日『世界・わが心の旅』・BS2・45分〕

在日韓国人二世として初めて東京大学教授となった政治学者の姜尚中 (カン・サンジュン) は、ドイツ留学の経験を持つ。そこで出会ったのは、ドイツ社会を最底辺で支える外国人労働者だった。姜氏は、「在日」が抱える問題とドイツ国内の問題とが、ある種の平行性をもっていることに注目し、日本社会におけるマイノリティの視線で、ドイツ社会のマイノリティ問題に、持ち前の鋭い観察眼を向けていく。1950年在日韓国人二世として熊本に生まれた姜氏は、1998年「在日」で初の東大教授に就任。専門はアジア近現代史からみる日本社会の分析。彼は29歳のとき、在日としてどう生きていくべきか思い悩んだ末に留学を思い立った。行き先はエアランゲンにあるニュルンベルク・エアランゲン大学。研究生という自由な立場で、図書館に通い読書に没頭する日々の中で、姜氏は

一人のギリシア人学生と出会う。そして彼を通じてドイツ社会の中で暮らすマイノリティすなわち外国人労働者とその家族の中で、自分の生きる道を見出していく。今回は、20年ぶりのエアランゲン訪問となり、大学で知り合ったギリシア人友人の実家のあるミュンヘンに向かうが、彼とその家族はすでにギリシアに帰国した後だった。姜氏は、友人との20年ぶりの再会を果たすためにギリシアのアテネへと向かった。

⇒関連映像資料：19. 「最底辺・西ドイツの外国人労働者」〔1998年12月2日・NHK・45分〕 <『法政理論』第33巻第3号(2001) p.91参照>

444. 「アンネ・ゾフィー・ムッター」〔2001年2月1日・『音楽ドキュメンタリー』・BS2・55分／原題：“Anne Sophie Mutter – A Life with Beethoven–“ 1998年 製作：RM/BBC/F3〕

世界的に活躍するバイオリニスト、アンネ・ゾフィー・ムッターは、1998年に世界各地でベートーベンのバイオリン・ソナタ全曲演奏会を行った。この番組は、その演奏会に臨むムッターを追ったドキュメンタリー映像である。ムッターは1977年にカラヤンとの共演でデビューを飾った。番組の冒頭でムッターは語る。「ベートーベンは生涯で10曲のバイオリン・ソナタを作曲しました。この10曲をすべて演奏することは、私とピアノ伴奏者オーケストラにとっての大きな挑戦です。今まで20年にわたって引き続けてきたこれらのソナタを、私は一年という時間をかけてじっくりと弾き込んでみることにしました。私にとってこのソナタにはまだまだ未知の部分が多く潜んでいます。この作品の中にある限りない可能性を引き出しながら、演奏していければと思っています」。この言葉はあらためて言うまでもないが、楽器を演奏するという行為は、単なる音のコピーではなく、絶えず一回的な発見や、演奏者独自の「音の世界」の翻訳〔解釈〕行為であることを強く裏付けている。ムッターは機会を見つけるとはボンにあるベートーベンハウス〔彼の生家〕を訪れ、手書き原稿の研究を行い、できるだけベートーベンの内面世界を読み取ろうと努力している。また番組の中では、よき音楽的パートナーである伴奏者である

ランバート・オーキスとのベートーベンのソナタをめぐる音楽談義を交えた練習風景が、大変興味深いものになっている。当時ウィーンの音楽新聞は、ソナタ第9番の「クロイツェル・ソナタ」について次のように報じている。「この曲を聞いていると、一種独特の美しさと芸術的テロリズムの脅威を感じて、ベートーベンの底力に圧倒される。この作品には特別な力が宿っている。とにかく彼は他の作曲家と一線を画する才能を持ち合わせている」。入念なりハーサルを終えた二人が入るのは楽屋裏、そしてメーキャップ。舞台のせりから、軽く声を掛け合いながら、二人はいよいよシャンゼリゼー劇場の表舞台へと上がっていく。この日演奏する曲目のひとつは、「バイオリン・ソナタ第10番ト長調作品96」である。

445. 「6000人の命を救った外交官～杉原千畝・ビザ大量発給決断の時～」

〔2001年2月7日『その時歴史が動いた』・NHK・45分〕＜以下は、番組資料保存のために、ホームページから引用した＞

出演者：松平定知アナウンサー。【出演者】関栄次（作家）ザンビア、ハンガリー駐在大使を歴任し1992年退官。その後、「遙かなる祖国」（PHP）「ハンガリーの夜明け～1989年の民主革命～」(近代文芸社)等の作品を執筆。

その時：1940年7月29日：杉原千畝 ユダヤ人へのビザ大量発給開始
番組のあらすじ：第二次世界大戦中、ナチスに追われたユダヤ人にビザを発給し、6千人の命を救った外交官・杉原千畝。去年公開された千畝の手記からは、これまであまり語られなかった千畝の姿が浮かび上がってきた。「多数ノ工作費提案アリ、一切拒否」。千畝は危険なスパイの仕事を要求されながら、それを拒み続けていた。また「特殊事務」のために赴任したリトアニアの領事館には、ドイツの秘密警察も潜んでいたという。ユダヤ人へのビザ発給は、千畝と家族の命を危険にさらす可能性もあったのである。しかし千畝は、頼ってきたユダヤ人たちの命を救うために決断をする。戦後、外務省を辞職させられた千畝だが、2000年10

月、ようやく外務省は正式に謝罪することにより、千畝の名誉が回復された。番組では、新しく公開された手記を軸に、千畝が官僚的な手続きにとらわれることなく、人道的な立場に立って、多くの命を救う決断を下した瞬間を描く。杉原千畝と本国の外務省とのやりとりその都度述べている言葉は、1. 杉原千畝の書いた手記 2. メモ 3. 杉原幸子夫人の著作「6千人の命のビザ」 4. 外務省外交史料館に残されている電報を用いた。杉原メモ杉原千畝が晩年に書き記したメモ。後に手記を書こうとした杉原が、その下書きとしてメモを書いたものと考えられる

杉原千畝のカウナス赴任の目的について：ソ連とドイツの情報を探るための赴任であった事は、日本とポーランドの研究雑誌「ポロニカ」において、杉原が自らの赴任理由について語っている。さらに、杉原はポーランドの地下組織とのつながりを持つことで様々な情報を得ていたことも、彼の言葉から聞くことが出来る。リトアニア：カウナス第二次世界大戦当時、リトアニアの首都だった街。現在は工業都市として発展。リトアニアに関しては、リトアニア大使館・日本領事館（カウナス）の建物は、現在日本文化センターとして管理されている。執務室のあった部屋は一般公開されている。問い合わせは、リトアニア大使館、あるいは旅行会社まで。グッジェのメモ（去年公開された杉原メモ）：一般の公開はされてはいないが、渡辺勝正氏「真相」（大正出版）の中でメモについて触れている。リトアニア併合と、領事館の明け渡し期限について：杉原千畝の「手記」の中で、8月25日までに領事館閉鎖の告知について触れている。（7月22日にソ連邦への加盟を決定、8月3日に併合が成立となった。）

⇒関連映像資料：459. 「ビザと美德」〈本稿61ページ参照〉

446.-447. 「エネルギーシフト(1)電力革命が始まった(2)ヨーロッパ市民の選択」[2001年2月10・11日・ETV・各45分]

石油や石炭など、いずれは枯渇する化石燃料から脱却し、半永久的に利用できる自然エネルギーに転換しようという動きが本格化し始めてい

る。番組では、今エネルギーの世界で起きつつある巨大な変化と最新の動向を2回シリーズで伝える。

(1) 電力革命が始まった。第1回は、電力の分野でもっとも激しい変化が起こっているヨーロッパ。日本では総電力の1パーセントに過ぎない『自然エネルギー』利用であるが、ドイツや北欧では風力発電を中心とする全エネルギー革命が進み、総電力の10パーセントを担うまでになっている。最先端を行くデンマークでは、今後30年で総電力の45パーセントを自然エネルギー（主に風力）で生み出すことを目標としている。また、ドイツは2000年、原子力発電からの撤退という歴史的な発表を行った。30年間、自然エネルギーの実用化の進まない日本と、急速な実用化を達成したヨーロッパの違いはどこにあったのか。そこには、制度改革を推し進めた名もなき市民たちの決断があった。「第二の市民革命」とさえ呼ばれるヨーロッパの「エネルギー・デモクラシー」の動きをたどる。

(2) ヨーロッパ市民の選択。エネルギー革命の最先端の動きを伝える2回シリーズの第二夜は、20世紀文明の象徴といえる自動車をめぐるエネルギー革命を取上げる。自動車の新しい動力源として「21世紀のエネルギー」の本命と目されているのが、水素を原料に電気と水を作り出す「燃料電池」である。水素は地球上に無尽蔵に存在し、二酸化炭素をほとんど出さないクリーンエネルギーである。自動車は2050年に今の3倍に当たる17億台が地球上を走ることになるといわれ、それだけいっそう地球環境への負荷もますます大きくなると懸念される。自動車産業の生き残りは、燃料電池開発にかかっているともしえる。番組では、急ピッチで開発を進める自動車メーカー、次世代の燃料の主役を伺う石油メジャー、さらには新しい交通インフラを模索する各国政府まで、未来の「水素社会」をにらんで進むエネルギー革命の舞台裏に迫る。

448. 「ドキュメンタリー・ドラマ ドイツ統一の舞台裏(1)自由を求めて」
[2001年2月11日・製作：ZDF（ドイツ第2テレビ）2000年・90分]

449. 「ドキュメンタリー・ドラマ ドイツ統一の舞台裏(2)歴史を変えた日々」[2001年2月12日・製作：ZDF(ドイツ第2テレビ)2000年・90分]

1989年10月6日、ベルリンの壁崩壊の約一ヶ月前。ソ連共産党書記長ミハエル・ゴルバチョフは、共産圏の優等生の弟とも言える「東ドイツ(ドイツ民主共和国)」を訪問。東ドイツの国家的指導者ホーネカーは、空港でゴルバチョフを出迎えるために精一杯に上機嫌な態度を演じて見せ。一方10月9日、ザクセンの商都ライプチヒでは5万人の市民デモが計画されていた。ライプチヒ市の党幹部は、こうした事態の収拾に苦慮していた。彼らは、市民デモの象徴的な存在であるライプチヒ・ゲヴァントハウス・オーケストラの指揮者クルト・マズアの自宅に集まり市民と出会い、デモの中止あるいは流血の惨事の阻止のためにひそかに話し合いを持った。10月9日、毎週月曜日の定例の市民デモが、夕刻に始まった。東ベルリン映像作家ラドムスキは、同僚のジギーと一緒に俯瞰撮影に絶好の位置にある教会の屋上からデモの一部始終を撮影。東ベルリン在住の二人は、いかにこっそりとベルリンを抜け出してライプチヒまで行くかが問題であった。ライプチヒに向かうすべての道路には警察と治安部隊が配備されていた。多数の治安警察部隊の車両が市内に入ってきた、市民がすでに不穏な空気を察知していた。病院には、流血の惨事に備えて大量の血液が搬入されているという噂がたちまち市民の間に広がった。多数の市民が集まったデモ会場の広場に、マズアの声が響いた。

「我々は共通の憂慮と責任を感じ、事態を解決する方法を模索しています。我々は社会主義の継続について自由に議論すべきです。全市民に約束します。ライプチヒだけでなく政府と対話が行われるよう全力を尽くします。この対話が平和的に進むよう慎重に行動してください」。ライプチヒの党幹部は、ベルリンの支持をあおいだが、何の連絡もなく、彼らは自分たちの責任において治安部隊を撤収させた。ベルリンの壁のちょうど一ヶ月前、こうしてひたひたと東ドイツにおける自由のうねりは

もはや後戻りすることなく進み始めた。政府の党幹部は、秘密警察がライプチヒ市内に取り付けた監視カメラで、市民の動向を一部始終見ている。市民のエネルギーはもはや止めようがないことを悟った幹部たちは密かにホーネカー解任を画策し始めた。だが新たに就任したエゴン・クレンツに東ドイツ国民はもはや何の期待もしていなかった。彼は、壁の崩壊後にこう語っている。『私はメディアの力を過小評価していた』。クレンツは貧乏くじを引いてしまったともいえる。

11月4日、東ベルリンのアレクサンダー広場で、東独政府が初めて承認した市民の抗議集会が開催された。11日、広場に集まった大群衆の前で、人権運動家や芸術家が演説をした。末端の政治局員であるシャボウスキも演壇に登った。「シャボウスキです。・・・今後も社会主義の道を、我々の手で力強く社会主義を築いていこう。人民がそれを求めているのだ」。社会主義の決まり文句のアピールは会場にむなしく響いた。一方、会場には「シャボウスキ、常套句はたくさんだ」という非難のプラカードもあった。演説が終わったとたん、会場はブーイングの嵐に包まれた。事態の緊急性を冷静に見ていたのは在東ベルリンのソ連大使館公使だった。彼は、一刻も早く『旅行法の改正案』を発表する必要性を見抜いていたのである。東独の国民が望んでいたのは、自由な国外旅行だった。

⇒関連新聞資料：

コール前首相の妻・病气苦に自殺【ベルリン支局5日】ドイツのコール前首相(71)の妻ハンネローレ・コールさん(68)が、同国南西部のルードビヒスハーフェンの自宅で亡くなっているのが、5日朝発見された。前首相の事務所は同日、病気を苦にしての自殺と発表した。ハンネローレさんは93年、病気の治療で使ったペニシリンが原因とみられるアレルギー性の病気にかかり、皮膚をまもるために日光や強い光線を避けなければならない状態だった。病状は1年ほど前から悪化。トルコのイスタンブールで行われた次男の結婚式にも出席できな

かった。〔『朝日新聞』2001年7月7日・朝刊(新潟)〕

450. 「法なきヨーロッパ～国際犯罪に揺れるEU～」〔2001年2月17日・BS1・90分〕

ヨーロッパの国々で政治外交経済など幅広い分野で協力していこうというEUでは、国境を越えて広がる犯罪に頭を痛めている。多くの司法関係者がこのことに危機感を抱き、1996年にはEU内の7人の司法官が『ジュネーヴ・アピール』に署名。国境を越えた犯罪情報の積極的な提供を呼びかけた。しかしながら、状況はその後ほとんど改善されていない。組織犯罪や汚職を摘発しようとしても、そのための具体的な手立てが存在しないためである。一国の刑法のごく一部が適用できる程度では、国際的な犯罪の摘発と処罰には対処できないでいるのが現状である。番組の中で、フランスの検事エリック・ドゥ・モンゴルフィエは次のように述べている。「メディアを通じて人々に訴えかけることは有効であると考え。メディアは大衆側の証人となり、正義を行使するための有力な手段になりうる」。1990年に調印された宣言協定によって、EU域内における人間の移動は大幅に自由になり、それが犯罪組織の動きを活発にさせている。彼らはいまや国境を越えてヨーロッパの中で非合法活動を行っている。共産主義のイデオロギーの崩壊した旧社会主義国においてさえ、裏の世界では闇組織<マフィア>によっていち早く市場の奪い合いが起きていた。人間の自由な経済活動が国境を越えている現実の中で、司法に関しては依然として一国の枠組みを超えていないというギャップが、今日の危機的状況の原因となっていることだけは確かである。

451. 「シリーズ・21世紀の世界像(1)ヨーロッパ統合の意味するもの」〔2001年2月12日・『ETV2001』・45分〕

1999年、欧州共通通貨ユーロが誕生。ヨーロッパは統合に向けて着々と歩みを進めている。他方、戦争の世紀といわれた20世紀が終わっても、世界の各地で内戦や紛争が続いている。そうした中でヨーロッパは国家

という枠組みを越えて連携し合い新たな世紀へと乗り出した。歴史学者・木村庄三郎は、ヨーロッパ中世史を長年にわたり研究してきた。木村氏は歴史との対話を繰り返しながら、過去に生きた人々の知恵を汲み取り、現在と未来を見つめる独自の文明論を提唱してきた。木村氏は現在ヨーロッパ統合の動きに注目している。木村氏は、21世紀の世界はどうなっていくのかのみならず、日本人のこれからの生き方にまで射程を広げ、番組の中で二回にわたり独自の文明論を展開する。

現在 EU には15カ国が参加している。これらの国々をあわせると、人口は3億7千万人、面積は日本の10倍以上になる。こうした広い地域の連携がなぜ可能なのか、木村氏はその背景を古代の歴史の中に求めている。現在のヨーロッパが生まれるきっかけとなったのは4世紀に始まるゲルマン民族の大移動であった。その結果、それまでこの地域の大半を支配していた「西ローマ帝国」が滅亡(476年)し、その後には小国が乱立する。8世紀にそうした小国の一つフランク王国にカール大帝(742-814)が現れることにより、情勢は一変する。カール大帝は強力な軍事力によって周辺の小国を次々に併合し、西ヨーロッパの大半を支配下に収めることに成功する。カール大帝の下で一つの王国を形成したことの経験が、EU 成立と深く関わっていると木村氏は考えている。もちろん当時イギリスは、王国の一部ではなく、イベリア半島はイスラムの支配下にあり、またカトリックという宗教権力の存在や一部の知識階級の共通言語としてのラテン語の価値の重さなど、歴史的に見て必ずしも相似形というわけではないが。さらに木村氏はヨーロッパでは成熟した地方が存在し、それぞれが密接に結びつくネットワークを形成していたという伝統と歴史がEUの統合を可能にしたと考えている。

⇒関連映像資料：460. 「ドイツ夢街道～王と皇帝の道～」〈本稿61ページ参照〉

452. 「シリーズ21世紀の世界像(2)地産地消・日本人の生きかた」〔2001年2月13日・『ETV2001』・ETV・45分〕

欧州、とりわけフランスの思想・文化に造詣の深い木村氏は、自らの欧州体験を基にして、これからの日本は地方文化再発見の時代であることを番組を通して示唆している。地方を見直すと言う発想は、そのまま国際化といわれる時代の潮流の中で、実はもっとも必要な発想につながっていると氏は指摘する。どこでも同じ商品を同じ値段で売っている技術文明の成熟期にあって、真に個性的な商品は、それぞれの土地の自然・歴史・文化と関わるものでなければならない。かつて日本は、国の中に「中央」という中心軸を設定して、その中央を通して諸外国との交流を進めてきた。日本にとっての国際化は、つねに『東京』という一つの窓口をとおして考えられてきた。つまり、これまで国際化と言え、地方にはまったく無縁なものと考えられてきた。しかし、現在は日本の中にたくさんある地方が、それぞれ日本の名の下に自分たちの世界を広げていくべき時である。どんな土地にも、その土地なりの自然があり、歴史があり、伝統文化がある。そうした土地ごとの文化の特性に自信を持って、より積極的に売り出していくべきである。番組のナレーションでは、木村氏の著書の一説が引用されているが、これがこの番組のコンセプトを的確に表現している。以下引用：「現在は未来の見えない時代である。明日は見えないから1960年代のように明日のために今日を犠牲にすることができない。だから今日一日一日をしっかりと生きていこうとする。壮大な思想体系を構築することよりも、自分の生活の細かなことに大きな関心を払うようになる。明治維新以来、生活というものが今ほど大きな関心事になった時代はなかったのではないだろうか」。

453. 「スコーピオンズ／ベルリン・フィル～モーメント・グローリー～」

[2001年2月14日・WOWOW・90分] [“Scorpions Live with the Berlin Philharmonic Orchestra, Moment of Glory”] 2000年6月22日, Preussag Arena Hannover EXPO (ハノーバー万博会場プロイサク・アリーナ)で収録。ハノーバー出身のドイツの人気ロック・グループ「スコーピオンズ」がベルリン・フィルハーモニーのフル・オーケストラと

競演する、クラシックとロックという異なるジャンルの音楽のコラボレーション。「モーメント・オブ・グロリー」は今回の万博のテーマ曲のタイトルである。そのほかの主な出演者：「ジェネシス」のボーカリスト：レイ・ウィルソン。

454. 「美しき音色を求めて～ウィーンフィル・楽器職人～」〔2001年2月14日・『ヨーロッパアンライフ』・BS1・20分〕

世界を代表するオーケストラ、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団。弦楽器の厚みのある豊かな音色は、独特のふくよかな響きを醸し出している。この美しい音色を陰で支えているのが、楽器職人オトマル・ラングさんである。バイオリンをはじめとするウィーン・フィルの弦楽器は、すべてラングさんが管理し、手入れをしている。ウィーン・フィルの本拠地となっているのが、ウィーンの中心部にある1870年創設の「ウィーン楽友協会」である。定期演奏会は楽友協会大ホールで開催される。19世紀から今日まで、ここで幾多のすばらしい演奏が繰り広げられてきた。オトマルさんは毎日楽友協会に出勤する。オトマルさんの弦楽器を扱う店がこの建物の一角にあるためである。店は、楽友協会創設のとき開かれ、初代店長は、ガブリエル・レンベック。店とウィーン・フィルの歴史は表裏一体であるといってもよい。ラングさんは27年前先代から店を引き継いだ五代目の店主でもある。それ以来店の屋号も伝統に従って「Otmar Lang」と改名された。店では楽器の一般販売もしているが、ラングさんの仕事の大半はウィーン・フィルの弦楽器の修理である。ラングさんは、団員にも全幅の信頼を置かれている。「私たちの仕事に、弾き手が満足してくれたときが最もうれしいです。音楽家にとっては自分の楽器が世界一大切だが、バイオリン職人にとっても自分が手がける楽器は大切である。必ずベストを尽くさねばならない、これが私の人生哲学です」。ラングさんが手入れした弦楽器もまた美しい音色を奏でている。音楽芸術というと、演奏者と聴衆の関係性が表面にでてくるのであるが、ラングさんたちのような、いわば芸術活動を支え

る裏方の存在に気づかせてくれるという意味では、ユニークな切り口の番組である。

455. 「ブルナー・最後のナチス」〔2001年2月16日・『ドキュメント地球時間』・ETV・45分・制作：M&Lバンクス・アメリカ、2000年〕

1940年6月、パリはナチスドイツに占領された。パリ郊外ドランシー(Drancy)にある公営住宅は、かつてユダヤ人の強制収容所であった。この住宅の広場には、今もなお、当時移送に用いられた貨車が置かれている。この貨車は、第二次世界大戦中、ここがユダヤ人の強制収容所であったことを現代に伝えるモニュメントにもなっている。1943年から翌年まで、このドランシーの強制収容所を統括していたのは、今なお行方を追われているナチス戦犯の生き残りアロイス・ブルナーであった。ブルナーはドランシーの司令官時代に、2万3千5百人ものフランス系ユダヤ人をアウシュビッツの絶滅収容所に送り込んだ。さらに彼は1万1千人に及ぶ子供たちもアウシュビッツに送り込んだ。アロイス・ブルナーは現在も行方を追われているナチス戦犯の中で最も重要な人物であるとされ、指名手配のナンバーワンである。「ブルナーはヒトラーの右腕とも言われていた恐ろしくまた残忍な男である」。ナチス戦犯追跡者(いわゆるナチ・ハンター)として有名なシモン・ウィーゼンタール氏は番組の中でこう述べている。ブルナーは1938年11月にウィーンで起きたユダヤ人の暴動を機に大量虐殺への道を歩み始める。その後ベルリンへ向かい、やがてパリへ渡る。1945年ナチス・ドイツの崩壊後は多くのナチス幹部が逃亡した。その中の一人がブルナーである。アロイス・ブルナーは1912年4月8日オーストリアのロールブルンで誕生。1931年、19歳のときにナチスに入党し、以後積極的な活動をする。1938年、ヒトラーはオーストリアを併合し、反ユダヤ活動も激しくなっていく。11月9日は、ベルリンを中心に「水晶の夜」と呼ばれるユダヤ人迫害の大事件がおきた。多くのユダヤ人商店が略奪や破壊の対象となった。ナチス親衛隊に入隊したブルナーは、アドルフ・アイヒマンの指揮下でユダヤ人移

送の任務につく。その際、ブルナーはユダヤ人の知識人や有力者を巧妙に利用し、より効率的なユダヤ人移送に成功し、しだいに頭角を表していく。ブルナーは戦後マルセイユとパリで開かれた軍事裁判で、二度死刑宣告をされた。現在、フランス・ドイツ・オーストリア・ギリシアの四カ国が身柄の引渡しを要求し、アメリカ議会が各国との折衝にあたっている。しかし、ブルナーは半世紀以上も裁きの手を逃れたままである。現在シリアで暮らしているといわれるブルナーは、1960年代初頭からダマスカスでシリア政府の顧問として諜報活動にアドバイスを与えていたとされる。しかし、シリアはブルナーが国内に潜伏していることを否定している。フランス政府は被告不在のままで裁判にかける決定をした。ナチス戦犯最後の大物といわれるブルナーは、なぜ逮捕を逃れたのか、そして誰が彼をかくまったのか。番組後半では、第二次世界大戦後の米ソ冷戦の中で、諜報活動の一翼になったナチス・ドイツのゲーレン機関とアメリカとの興味深いかかわりが取上げられている。番組の中の証言では、それを「ブルナーを含めたナチス戦犯容疑者とアメリカの諜報機関との闇の同盟関係」と指摘している。戦後偽名をつかって炭鉱夫として働いていたブルナーは、やがてヨーロッパを離れるためにカトリックの総本山バチカンの神父のもとに身を寄せた。バチカンは、ナチス・ドイツの幹部の脱出の手助けをしていたということは、ヨーロッパ社会における「アンティ・セミティズム (反ユダヤ主義)」の根深さを暗にほのめかしているともいえる。

⇒関連映像資料：

456. 「さよなら子供たち」 ("Au revoir les enfants", 1987年 フランス＝西ドイツ合作)

1977年以来、創作活動の拠点をアメリカに移していたフランス・ヌーヴェルバーグの映画監督ルイ・マルが10年ぶりにフランスに帰って撮った彼の自伝色の濃い作品。1944年、映画の舞台はナチス占領下のフランス。パリから地方のカトリックの寄宿学校に疎開している12歳の少年ジ

ユリアンは、転校生のジャン・ボネと親しくなるが、あるとき実はボネがユダヤ人であり、学校でかくまわれていることを知る。学校の料理番をしている一人の若者の密告でゲシュタポ<ナチスの秘密警察>が学校に踏み込んできたときにジュリアンとボネの友情は終わりを告げる。ボネはゲシュタポに連行され、そして二度と帰ってこなかった。(106分)

457. 「魔女の森の夜祭り～ドイツ・シールケ～」[2001年2月16日・『地球の街角』・NHK・30分] ナレーション：弥永和子。

ドイツの首都ベルリンから南西へ約200キロメートル、かつての東西ドイツの国境地帯に位置しているのがハルツ山地。この地域では中世以来「魔女伝説」が語り継がれている。伝説によると4月30日の夜、魔女たちはこの森で集会を開き、魔王の命令に従って悪ふざけをするのだという。村人が、その夜自ら魔女の扮装をしてその力を封じ込めようとしたのが「ワルプルギスの夜」と呼ばれる祭りである。ハルツ地方の村々にとって「ワルプルギスの夜」は一年で最も重要な行事である。祭りには森や大地を恐れる気持ちとともに、芽吹きを春を迎える喜びもこめられている。人々はこの祭りを通じて厳しい自然の中を生き抜いてきた先祖たちの思いを今もなお受け継いでいる。ハルツ地方には19世紀末に観光目的に敷設された山岳鉄道が走っている。山地には花崗岩がむき出した山肌と、うっそうと生い茂るトウヒの森が広がり、この地方独特の自然景観を形成している。山岳鉄道は、ハルツ山地の最高峰、標高1142メートルのブロッケン山を目指してゆっくりと登り、ふもとからおよそ1時間で山頂駅に到着する。ドイツが東西に分断されていた時代には、国境に近いブロッケン山は軍事上の理由から一般の立ち入りは禁じられていた。統一後、再び登山客や観光客に開放された。山頂からは素晴らしい眺望が開ける。ブロッケン山は古くから神秘的な魔の山として知られ、ゲーテの代表作「ファウスト」でも、魔女と悪魔が集会を持った「ワルプルギスの夜」の舞台として描かれている。シールケ村は、山頂から少し下ったところに位置し、かつて村人たちは炭焼きで生計を立てて

細々と暮らしていたが、近年、神秘の山の村というイメージが人気を呼び、多くの観光客を集めるようになった。シールケ村に住むイングリッド・ヒンツェさんは、郷土の文化や民芸の研究家であるが、魔女についても詳しく、これまで論文や本を数多く発表してきた。かつて中世の人々は古くからの信仰を捨ててキリスト教に改宗することを迫られ、それに抵抗した人々は、男女を問わず魔女と呼ばれて厳しい迫害を受けた。しかし迫害にもめげずに自分たちの信仰を守るために、森の奥深くにある洞窟や、人里はなれた墓地、荒地などでひそかに集会を持つようになった。こうして社会的異端者としての魔女のイメージが形成されていく。最近ドイツでは、神秘主義や中世の古い信仰への関心が高まっているが、これはデジタル社会における、アナログ的なものへ癒しを求める傾向といっても良いかもしれない。番組では、4月30日に迫った祭りの準備に多忙な村の人々の様子を伝える。祭りの日、村は2万人の観光客を迎え大にぎわいとなり、経済効果も大きいドイツ版「村おこし」の成功例とも言えよう。そしてにぎやかな祭りが終わる頃、シールケ村には北国の遅い春が訪れる。

⇒関連映像資料：200. 「ヨーロッパ冬物語・舌を出せ 愚者たちの祭典 ～ドイツ・ウルム市～」 [1997年2月27日・BS2・50分] <『法政理論』第35巻第4号 (2003) p.170-171. 参照>

⇒関連映像資料：180. 「ドイツ・笛吹き男との出会い」 [1997年10月5日・BS2・45分] <内容・解説は『法政理論』第35巻第4号 (2003) p.154-155. 参照>

458. 「カポ～ナチスに協力したユダヤ人～」 [2001年3月3日・『ワールド・ドキュメンタリー・スペシャル シリーズ：戦争の中の人間』・第5回・BS1・50分]

番組は、1961年に行われた「アイヒマン裁判」の記録映像から始まる。この裁判が国際的な関心を集めていたころ、同じイスラエル国内では別の裁判が進行していた。裁かれるのは、ナチスの強制収容所でナチス親

衛隊の手下となり、囚人を監視する仕事をしたユダヤ人(いわゆる KAPO) たちである。同じユダヤ人でありながら、KAPO は大量虐殺に手を貸すことにより、その代償として生き延びた人々であった。彼等は、ナチスに命じられて、あるいは自発的にユダヤ人収容者の弾圧に加わった。番組の中で、人間性の本質をえぐるような、深いため息と共に想起される言葉がある。『腹を空かせた人間は正気を失う。それがすべてである』。<製作: SET プロダクションズ、製作年: 2000年、製作国: イスラエル。なお、この番組は毎年すぐれたテレビ番組に対して与えられる『国際エミー賞』において、2000年度のドキュメンタリー部門で受賞した>

459. 「ビザと美德」〔2001年3月4日・『衛星映画劇場』・BS2・30分〕

第二次世界大戦中に1000人以上ものユダヤ人を救ったオスカー・シンドラの名は、アメリカの映画監督 S・スピルバーグの映画などを通じて良く知られるようになったが、同じ時期、まったくの無償の行為として6千人ものユダヤ人の命を救った日本人がいた。リトアニア領事代理として赴任していた杉原千畝(ちうね)は、ナチスの迫害を逃れるために出国を求めるユダヤ人難民のために、日本政府の中止命令を無視してビザの発行を続けた。この映画は、日系3世のクリス・タシマ監督が、外交官生命を犠牲にしてまで自らの信念に従った杉原を、その妻の視点に立って描いた26分の短編映画。タシマ監督自身が杉原を演じ、脚本も書いたこの意欲作は、アカデミー短編映画賞を受賞し、世界中で絶賛された。悲しい題材を扱いながら、夫妻と難民たちの交流が時にユーモアを交えてほほえましく描かれ、深刻ぶった堅苦しいだけの映画にしていない。<原題は、“Visas and Virtue”>

⇒関連映像資料: 445. 「6000人の命を救った外交官～杉原千畝・ビザ大量発給決断の時～」〔2001年2月7日『その時歴史が動いた』・NHK・45分〕<本稿48ページ参照>

460. 「ドイツ夢街道～王と皇帝の道～」〔2001年3月4日・NT21<テレ

ビ朝日系列>・90分]

かつてローマ帝国が繁栄を誇っていた頃、現在のドイツはほぼ全土的に深い森に覆われていた。ドイツ人の先祖ともいえるゲルマン民族はローマ人からは野蛮な人間とみなされていた。ライン川とドナウ川はローマ帝国の辺境の防衛線であり、さらにローマ人たちは、陸地の上に土塁と堀をうがった防衛線を築いた。これは、リーメス (Riemes) と呼ばれ、全長700kmに及び、要所要所にはローマ軍団の堅固な砦が築かれた。女優の星野知子は、このリーメスにほぼ沿う形で、ローマ皇帝とその後継者とも言えるフランク王国のカール大帝 (シャルルマーニュ) の歴史の足跡を訪ねる旅に出る。星野がたどる主要都市は以下のとおりである。(1)マインツ：マインツはライン川に面した町で、古くからライン川はヨーロッパの重要な運搬路であった。中世には司教座が置かれマインツ大司教は絶大な権力を振るった。ここには現在「古代船博物館」があり、出土したローマの軍船が展示されている。(2)フランクフルト：町の名前の由来は、カール大帝が命名したもの。フルト (Furt) は「渡し場」の意味で、フランクフルトは「フランク人の渡し場」という意味になる。ここから北へ20kmの町ザールブルクには、リーメス線上にローマ軍の砦が復元された。(3)アシャッフエンブルク(4)ミルテンブルク：木組み家屋が良く保存されている。(5)ヴェルトハイム：ドイツ3大名勝地の一つ。(6)ヴェルツブルク：741年マインツのボニファチウス大司教が開いた町。(7)バンベルク：ここは町全体がユネスコの世界遺産に登録されている。(8)ニュルンベルク(9)ヴァイセンブルク：ここでは1977年にローマの大浴場の遺構が発掘されている。(10)レーゲンスブルク：中世にカール大帝の王宮が置かれたこの町が、王と皇帝の道の終着点となる。
⇒関連映像資料：451. 「シリーズ・21世紀の世界像(1)ヨーロッパ統合の意味するもの」<本稿53ページ参照>

461. 「日本にやってきたZ I V I S・二人のドイツ青年」〔2001年3月9日・BSニュース・BS1・10分〕

「良心的兵役拒否制度」が法制化されているドイツ出身の青年3人が3月から約1年間、兵役代替勤務として東京都町田市の障害者授産施設で、古紙回収や障害者の仕事の手助け・介護などを行う予定になっている。来日するのは、ベルリン出身のダニエ・ザイデ (19)、ローベルト・クレッパー (20)、旧東ドイツ・マイセン出身のゲラルド・マテー (19)。クレッパーは、兵役を拒否した理由について「殺人のための訓練は受けたくない」と話し、ザイデは日本を選んだ理由について「日本でならこれまでにない違った経験ができるのではないかと思った」と語っている。期間中は原則として無給で、滞在費は施設側が負担することになる。徴兵制度のあるドイツでは、18歳に達した男子には10ヶ月の兵役が課せられるが、基本法で「良心上の理由に基づいて」兵役を拒否する権利も認められている。この場合、代替となる無償労働がドイツ国内では11ヶ月、国外では13ヶ月課せられる。米ソの対立する冷戦が終結し、ドイツ連邦軍の役割に対する考え方も変化したことにより、良心的兵役拒否者数は年を追うごとに増加している。現在、兵役義務者の4割近くは良心的兵役拒否をし、2000年6月現在、およそ10万人の著者が代替役務についていると言う。なお、ZIVI (S:複数語尾) は<Zivildienst:市民奉仕ないしサービス>から作られた新しいドイツ語である。

462. 「ラインのさざなみ～ヨーロッパ・エネルギーの選択～」〔2001年3月10日・製作・著作: TeNY<日本テレビ系列>・55分〕

人類が石油を燃やしてエネルギーを得るようになってから100年が過ぎた。化石燃料の使用は、今、地球温暖化という新たな環境破壊問題を作り上げている。番組制作スタッフは冬のヨーロッパで、新しいエネルギーを模索する人々を訪ねていく。

デンマーク: デンマークは風力発電の先進国の一つで、原子力発電所は持っていない。一人当たりの発電量は世界一を誇る。風力発電は、二酸化炭素を出さないクリーンなエネルギーとして、今世界中が注目する自然エネルギーの一つである。中心地域は、北部のユトランド半島一体で

ある。日本の各地で見られる風力発電装置でもよく知られた会社である Vestas 社は、デンマークに本社を置いている。新たな風力発電プラントに関わる新たな問題も起きている。住民との摩擦の原因は、景観破壊、騒音、地価の低落などで地域住民と経済的補償をめぐる摩擦も生じている。そこで、陸地ではかなり過密状態になったデンマークでは、海上プラントの計画を進めている。デンマーク周辺の海は遠浅なために建設コストは、陸地の2倍に押さえることができた。将来的には、海上風力発電は、最も安いコストのエネルギー獲得手段になると予測されている。

ドイツ：ドイツでの旅は、ベルリンのブランデンブルク門の紹介から始まり、旧東ドイツ地域のブランデンブルク州の『褐炭（かたん）の露天掘り』地域取材する。褐炭は、戦後ドイツの復興を支えてきたエネルギー資源で、このまま掘り続けても、あと500年は大丈夫といわれている。しかし、褐炭は燃焼により窒素酸化物や硫黄酸化物を大量に排出する。旧東ドイツに深刻な環境破壊を引き起こしたのがこの褐炭であった。旧東ドイツのビッターフェルト (Bitterfeld) は、かつて世界最悪の環境破壊都市と呼ばれていたが、東西ドイツ統一後、政府は3年かけて旧式の工場をスクラップにして、最新鋭の工場や、公害対策の整った発電所を建設した。

グライフスヴァルト (Greifswald) : バルト海に面した美しい町。ここは旧東ドイツ時代、原子力発電所の基地であった。原子炉は旧ソ連製の加圧水型、褐炭火力発電所とともに旧東ドイツの電力をまかなっていた。統一後は、安全性に問題があるとして封鎖、ドイツの電力事情は再編成されることになる。現在のドイツの発電電力のシェアは、原子力：30.2%、褐炭：26%、石炭：27.5%と、合わせてほぼ90%の燃料資源が自前で確保されている。その意味ではドイツはエネルギーの安全保障も手にしているといえる。2000年6月15日、ドイツ政府と電力業界は原発の段階的廃止で合意に達するという画期的な出来事があったことはまだ記憶に新しい。ドイツは世界第3位の経済大国。経済大国と呼ばれる国

での脱原子力はまだ例がないということで世界中に衝撃を与えた。

シュターデ (Stade) : ベルリンから北西へ300キロのエルベ川の河畔に立つシュターデ原子力発電所。ここは脱原子力の政策決定により最初に廃止されるといわれている。ここを所有するエーオン電力は、2003年までに閉鎖する計画を明らかにした。この前倒しについて、電力側は『電力の自由化』によるものとしている。さらに『脱原発』は一面において、企業の合理化やリストラの根拠になっているという、うがった見方も出ている。

463. 「ブラック・セプテンバー～五輪テロの真実～」〔2001年3月20日・WOWOW〕

1972年、パレスチナ・ゲリラの過激派<黒い九月>がミュンヘン・オリンピック開催中に起こしたこの事件は、最終的に16人が命を落とすという五輪史上最悪の事件となった。本作は当時の映像、遺族や事件の関係者(現在唯一生きているテロ団の一人を含む)の証言、さらにCGを駆使した事件の再現映像から構成される。ヒトラーが率いた第二次世界大戦前の1936年のベルリン五輪以来、40年近い時を経て『平和の祭典』五輪がようやくドイツに戻ってきたにもかかわらず、また新たな悪夢が一つ生まれることになる。この作品は、第72回アカデミー賞で長編ドキュメンタリー賞に輝いた。

<事件のあらすじ>1972年9月5日の早朝、ミュンヘンのオリンピック村。武装した<黒い九月>の一団は、イスラエル選手団宿舎を襲撃し、9人を人質にとって立てこもる。彼らがドイツの治安当局に要求した飛行機が待つ空港に向かうと、そこで彼らと特殊部隊との間で凄まじい銃撃戦が展開される。この結果、事件によって捉えられたイスラエル人選手の人質9人全員を含む11人と、<黒い九月>の5人が命を落とした。

<原題: "One Day In September" 監督: ケヴィン・マクドナルド、ナレーションはアメリカの俳優マイケル・ダグラス。ジャンル: ドキュメンタリー映画、製作国: イギリス、製作年: 1999年・95分>

464. 「EUの光と影(1)官僚主義との戦い」〔2001年5月13日・『BSドキュメンタリー』・BS1・50分・製作：DR・デンマーク・2000年〕

1993年11月、政治・経済・外交の面でヨーロッパの国々が幅広く協力していくためにEU（ヨーロッパ連合）が発足した。そこで運営の予算を承認したり、運営を監督したりする機関が「ヨーロッパ議会」である。議会は毎週のように開かれ、加盟15カ国から626人の議員が開催地ストラスブールに集まってくる。現在、EUの制度・予算の使い方・運営方法について、さまざまな批判が出されている。EUでは、毎年130兆円の予算が動かされているが、その使われ方は想像以上にずさんをきわめているらしい。番組では、議員に対する出張旅費の水増し支払いを皮切りに、官僚制度が本質的に抱えるいくつかの問題を取り上げて、組織運営のありかたについて鋭い疑問を提出している。EUの予算は、もとをただせば加盟各国の国民の税金が使われているのであるから、このシリーズ番組を制作したデンマークのテレビ局DRの問題提起とその切り口は、欧州の視聴者の関心を強く引いたことが推測される。ひるがえってわが国の官僚制度にまつわるいくつかの弊害について思いをめぐらすと、番組で扱われる内容ときわめて平行性を持つことが分かり、先進国に内在する共通した「病（やまい）」と官僚制度の因果関係が透けて見えてくる。

465. 「EUの光と影(2)消えた援助金」〔2001年5月20日・『BSドキュメンタリー』・BS1・50分製作：DR・デンマーク・2000年〕

1990年代の初め、ボスニア紛争が勃発、ヨーロッパ諸国はユーゴスラビアに対して人道援助を行った。その先頭に立ったのは、1992年に設立されたEUの下部組織「人道援助局（ECHO）」であるが、援助金の一部は、紛争に苦しむ人々には行き届かずEUの官僚のふところに流れ、このときおよそ3億円の金が行方不明となったといわれる。このうち2億円は今も行方不明である。ECHOは当初、アフリカの地域紛争に苦しむ人々の支援などの活動で高い評価を受けたが、人道支援業務の拡大

につれて次第に資金不足に陥り、予算獲得のため架空のプロジェクトを捏造するまでになり、経理面でも乱脈をきわめていく。許可の下りた3つのプロジェクトは実行に移されないまま、支援の実行部隊ともいえる委託業者との癒着も問題となってきた。EUの「詐欺犯罪対策室」は、不正疑惑に気づき内定を始めたが、決定的な証拠がつかめなかった。やがて内部告発者が現れた。第2回目は、EUの巨大な官僚制度から必然的に起こりうる官僚の犯罪について、そして消えた3億円の行方を追跡調査していく。もちろんこの種の疑惑にお決まりのことであるが、EUの上層部から捜査に圧力がかかった。不正に関わったと疑われている官僚は、今もなおEUの要職につき、不正疑惑の追及を逃れたままである。まれに見る詐欺事件が迷宮入りとなると、ひそかにほくそ笑むのは一体誰なのか。番組ではその答えは提示されていない。

466. 「EUの光と影(3)岐路に立つ農業」〔2001年5月27日・『BSドキュメンタリー』・BS1・50分・製作：DR・デンマーク・2000年〕

EUの拡大路線は、やがて旧社会主義国をもその射程に入れている。だが、これらの国の基幹産業は農業で、零細な農家が多いことも事実である。これまでの西ヨーロッパ中心のEUにおいては、農家は補助制度で手厚く保護されてきた。今後あらたに加入する東ヨーロッパ諸国の農民に対しても、同じように保護政策を採り続けるとすれば、EUが財政的に破綻することは明らかである。番組では、ポーランドの農家を具体的事例としながら、これからの拡大EUが抱える問題の一つである、農業政策なканずく「補助金」の存続拡大かあるいは廃止かの問題について取り上げている。

467. 「グラーツ歴史地区」〔2001年5月27日・『世界遺産』第254回・BSN<TBS系列>・30分〕

グラーツは、ウィーンについてオーストリア第2の都市で、その名前はスラブ語で「小さな城」を意味するグラデツに由来する。イタリア・ルネッサンス芸術の影響とハプスブルク家の財力が今日見られる街の輪

郭を作り上げた。グラーツはまた近世において中央ヨーロッパを東のオスマン帝国の脅威から守る拠点でもあった。そのため城塞建築技術が進んでいたイタリアから建築家が呼ばれ、彼らは城塞建築と宮殿建築のために存分に腕を振るうことになった。番組で紹介される「州庁舎中庭」もイタリア人建築家によるもので、イタリア国外で最も重要なルネッサンス建築のひとつといわれている。ついで紹介されるのは、現存するヨーロッパ最大の「武器庫」。武器、甲冑などおよそ3万点が保存されているが、16世紀から17世紀のものが多い。これらは度重なる東方からの異民族の侵入に備えるため作られたものである。中には馬のための甲冑もあり、完成までに2年を要したという。最後に紹介されるのは、グラーツのシンボルといわれる「時計台」。完成したのは1561年、時計についていたのは時間を示す1本の針だけ。のちに分を表す針もつけられたが、時間を示す針が重要であるという理由から長針で時間、短針で分を示す不思議な時計となった。(英語名: City of Graz - Historic Centre
登録年: 1999年)

468. 「中国巨大市場の攻防(1)ドイツ企業はなぜ強いのか」〔2001年6月3日・BS1・50分〕

中国はWTOへの加盟を控えて外国企業の積極的な投資を促している。その中国においては車の台数は1500万台を超えたとされているが、そのほとんどがドイツ(德国: 中国語表記)のブランドである。中でもVW(Volkswagen)は、中国の乗用車の57パーセントを超えている。VWは「国民の車」という意味であり、中国では「大衆」と訳されている。一方、日本車のシェアは、合計で30パーセント程度、ドイツは15年以上をかけて販売店や修理工場を現地に作り中国社会に根を張ってきた。VWは「大衆」という会社で完全に中国製として生産され、それが中国人には自分たちの車であるという意識を根付かせることに成功している。そのように中国人のプライドとナショナリズムを刺激しない形で着々とドイツ車は中国市場に定着しつつある。しかもドイツは日本と

は違い、第二次世界大戦において中国人にとっては戦争加害者ではなかっただけに、日本車に比べると有利である。さらにVWは「上海大衆工場」を作り、積極的な技術移転を進めている。工場のドイツ人経営者は次のように語る。「教えて損する技術はない。我々の技術は、つねにその先を歩いているのだから」。これはドイツ人に共通したモノ作りに対する自負であり、また哲学でもあるだろう。番組では、VW以外に中国の書籍流通業界に市場を拡大しつつあるヴェルテルスマン社などを取材していく。紹介されるドイツ企業でも大変興味深いのは、小さなソーセージ工場から出発して、やがて「ドイツ食品センター」を立ち上げたシュテファン・シンドラー氏の取材である。シンドラー氏は、冷戦時代は東ドイツの中国滞在武官であったが、在任中にベルリンの壁が崩壊し、彼が忠誠を誓う東ドイツという国家は地図上から消滅した。苦境に陥った彼に助言をし、積極的に支援してくれたのは、中国人民解放軍の彼の友人達であった。

469. 「三宅一生 ベルリン・都市を呼吸する衣服」〔2001年6月30日『美と出会う』・ETV・25分〕

衣服デザイナー・三宅一生は従来の既成概念にとらわれない斬新なデザインを発表してきた。彼は自分の新たな仕事の発表の場としてベルリンを訪ねる。彼はベルリンを選んだ理由を次のように語る。「ベルリンは最もファッショナブルな街であり、同時に最もファッショナブルな街ではない。つまり‘ファッショナブル’を越えた街であるからだ」。

470. 「56年目の償い～ドイツ・強制労働の被害者たち～」〔2003年7月18日・『クローズアップ現代』・NHK・30分〕

第二次大戦中、ナチスドイツの支配下で行われた強制労働の被害者に対して、先月27日からドイツ政府と企業によって補償金が支払われている。戦後半世紀以上を経てドイツが責任を追及された背景には、90年代末にアメリカで多発した集団訴訟があった。世界各地に今も100万人以上は生存すると言われる被害者を、アメリカの弁護士が集団訴訟の下に

集めたのである。企業は戦時中の責任をどう問われ、正確な人数のつかめな被害者にどのように補償金を支払っていくのか。また、同じ弁護士たちが日本企業に対して起こしている訴訟には、どのような影響があるのか。半世紀後の補償の背景を探る。(NO.1458) スタジオゲスト：矢野久 (慶応大学教授)、衛星生中継出演：二村伸 (NHK ベルリン支局長) *以下の参考データは、番組のホームページを参考にした。

ドイツ政府と企業による財団「記憶・責任・未来」について：政府と企業が50億マルクずつ、合計100億マルク (日本円でおおよそ6000億円) を拠出し、強制労働の被害者に補償するもの。被は一人当たり日本円で最高でおおよそ80万円を受け取る。被害の度合いによって金額は異なる。最初の支払いは、ポーランドで、6月28日に始まった。詳細は以下のドイツ語と英語のホームページが参考になる。

<http://www.stiftungsinitiative.de/eindex.html>

アメリカの裁判所で訴えられたドイツ企業について：上記財団のホームページに掲載されている。Treaties and Statement という項目を開くと、Joint Statement Annex C と D という所に詳しい訴訟リストが出ている。これが全てではないが、訴訟件数は60件以上と言われている。現在は、補償金支払いは財団によって行われることになったので、全ての訴訟は今のところ棄却されている。被害者は補償金を受け取る代わりに、今後訴訟を提起しないという誓約文を書かされる。更に被害者が新たに訴えを起こすことは可能であるが、裁判所によって棄却される見通しが高いと言われている。

ドイツ企業を訴えたアメリカの弁護士について：マイケル・ハウスフェルド弁護士 (ワシントンに事務所を構える。ホームページは <http://www.cmht.com/>)

世界最大のユダヤ団体について：世界ユダヤ人会議 (World Jewish Congress、<http://www.wjc.org.il/>) <http://cyber.law.harvard.edu/torts3y/readings/update-a-02.html>

アメリカ人でない被害者がアメリカの裁判所で訴えを起こすことができる理由について：外国人不法行為請求権法による。英語名は Alien Tort Claims Act (ATCA), 28U.S.C. § 1350。元々アメリカ建国当時、海賊の被害者を救済するために作られた法律。ハーバード・ロースクールのホームページに詳しい解説が出ている。

⇒関連映像資料：「劉連仁～54年目の証言～」〔1998年10月8日・ETV・45分〕

471. 「過去を問われたドイツ企業～強制労働・56年後の償い～」〔2001年6月30日・『ウィークエンド・スペシャル』・BS1・50分〕

ドイツの首都ベルリンの郊外にあるザクセンハウゼン強制収容所。ここにはナチス時代の悲劇の跡が今も残されている。当時ここでは劣悪な環境で、過酷な労働を強いられ多くの人々が命を落とした。ナチスはユダヤ人だけではなく、東欧や旧ソビエトから1000万人を越える人々を組織的に強制労働に駆り出した。占領地域から連行された人々は、国営企業だけでなく、民間企業にも送り込まれた。収容所の入り口には、皮肉な看板が掲げられていた：“Arbeit macht frei” <働けば、自由になる>。ナチス・ドイツ下で組織的に行われた強制労働の実態に光が当てられるようになったのはごく最近のことである。そして当時の強制労働には、ドイツの企業が深く関わっていたことが明らかになってきた。アメリカの弁護士達は、その責任を裁判で追及した。戦時の強制労働に企業はどこまで責任を負うべきなのか。ドイツ企業の戦争責任を追及する訴訟は、さらにアメリカとドイツの政府を巻き込んで拡大していった。そして難航を極めた交渉の末、2001年6月、被害者への保証金の支払いが始まった。アメリカ市場に投資を拡大する傾向にあったドイツ企業が、アメリカ政府にも強い影響力を持つといわれるユダヤ人団体のしかけたトラップに落ちたという見方は根拠がはっきりしない。ともあれ、番組は3年にわたる強制労働の被害者とドイツ企業およびドイツ政府との粘り強い交渉過程を紹介する貴重なドキュメンタリーとなっている。

⇒関連新聞資料：花岡事件（秋田県大館）に関する新聞記事。

「一部被害者和解を拒否・花岡事件、米で提訴へ【北京26日＝五十川倫義】太平洋戦争末期、日本に強制連行された中国人労働者が犠牲になった「花岡事件」をめぐる、被害者と遺族ら二十数人が、東京高裁で昨年11月に成立した花岡訴訟の和解と「救済措置」を拒否したことが26日、明らかになった。この中には同訴訟の原告も含まれている。拒否者の一部は鹿島（旧鹿島組）を相手に損害賠償と公開謝罪を求め新たな訴訟を米国で起こす方針だ。「十分な理解を得られず残念」原告弁護団長 東京高裁での和解に携わった原告弁護団長の新美隆弁護士は『和解の意義について十分に理解してもらえず残念だ』と話した。和解内容に基づいて8月には基金からの配分が始まる見通しで、「今回の提訴で、基金の活動が影響を受けることはない」という。生存者ら32人に慰霊式参列へ・きょう来日「花岡事件」の生存者・遺族32人が、和解金で設けられた「花岡平和友好基金」で28日、来日する。中国赤十字会の蘇菊香秘書長らも同行し、事件が起きた秋田県大館市が主催する30日の「中国人殉難者慰霊式」に参列する。」

472. 「自由へのトンネル～ベルリン・1962年～(1)愛する人のために」〔2001年7月20日・『ドキュメント地球時間』・ETV・45分、制作：ドイツ／SWR（1999年）〕

473. 「自由へのトンネル～ベルリン・1962年～(2)再会」〔2001年7月27日・『ドキュメント地球時間』・ETV・45分、制作：ドイツ／SWR 1999年〕

1961年8月、ベルリンは壁によって東西に分断された。その翌年の春、西ベルリンに住む学生たちは、東ベルリンに向けてトンネルを掘り始めた。作業を取り仕切ったのは4人の学生、東ドイツから西ベルリンへ逃げてきたウリ・ファイファーとハツソ・ヘルシェル、そしてイタリアから西ベルリンへ留学中のルイジ・スピナ（通称ジジ）、ドメニコ・セスタ（通称ミモ）。彼らの目的は、愛する家族や友人を西側に脱出させる

ことだった。この番組は、アメリカのテレビ局 NBC が、トンネルへの資金提供と引き換えに計画の一部始終を撮影した貴重な記録映像をもとに構成した番組。

ベルリンの壁が構築される前は、東西ベルリンの行き来は自由であったため、西ベルリン経由で東ドイツから大量の難民が流れ込んでいた。西ベルリンには難民キャンプ場が (Notaufnahmelage) が設けられた。1961年8月13日深夜、突然東西ベルリンの交通が遮断され、急ピッチで東西ベルリンの境界線に有刺鉄線が張り巡らされる。いわゆるベルリンの壁の構築の始まりである。初めのうちは、境界線に近いビルの窓から脱出したり、建物屋上から飛び降りたりしてまだ脱出が可能であったが、やがて壁に沿ったすべての窓がふさがれてしまう。ファイファーとヘルシェルは、東ベルリンにいる友人のペーターを何とかして助けたいと思ったが、ペーターには小さな娘がいた。やがてジジとニモは、トンネルを掘ることを思いつく。東ベルリンから逃げてきたヘルシェルとファイファーも即座に同意した。ハッツは、1956年「東ベルリン暴動」が起きた時に警察に逮捕され、二年間の獄中生活の後1958年に出所。多くの友人は拷問を受けたり、再び刑務所から出てくることはなかった。それ以来ヘルシェルは東独政府に復讐を誓っていた。トンネルを掘る場所は、ベルナウアー通り (Bernauerstr.) と決定した。145メートルのトンネルを掘る4人の戦いが始まった。やがて協力者も現れ、自由へのトンネルが少しずつそして密かに掘られ始めた。

関連新聞資料⇒

「旧東独保安省トップ エーリヒ・ミールケ氏 (旧東独の元国家保安相) 21日死去。97歳。旧東独の秘密警察であった国家保安省 (シュタージ) のトップを1957年から「ベルリンの壁」が崩壊した89年まで勤め、「恐怖の支配者」と呼ばれた。ベルリンの壁を越えて西側に逃亡しようとした旧東独市民殺害の責任を問う「壁裁判」で92年に起訴されたが、健康上の理由から公判中止になった。ただ、31年 (原文ママ: 81年の誤

植かと思われる・筆者)の警察官殺害事件をめぐっては93年に禁固6年の判決を受けた。出所後、今年から老人ホームに入所していた。(ベルリン支局)〔『読売新聞』2001年5月27日・朝刊(新潟)〕

474. 「がん・苦痛と不安に向き合う～ドイツ補完療法の試み～」〔2001年7月28日・BS1・50分〕

ドイツの人口はおよそ8000万人あまり、そのうち一年間におよそ34万人が新たにかんと診断されている。最先端の現代医学でも治療が難しいがんの患者が数多くいる。その症状をどのようにやわらげていくのかが、大きな課題になっている。患者の心身の負担を少しでも減らしたい。そうした中、ドイツでは「補完療法」に注目が集まっている。温熱療法やマッサージ、心理療法など、「補完療法」は、がんそのものを治すことはできないが、体をほぐし、気持ちをやわらげる。国立大学の病院でも、がんによる傷みや不安を少なくしようと「補完療法」を取り入れる動きが少しずつ広がっている。『現代医学だけではできないこともあると感じ、「補完療法」を取り入れることにしたのです』と、ハイデルベルク大学の教授は語る。「補完療法」では、伝統的に使われてきた薬草なども用いられている。その薬を科学的に見直すプロジェクトも始まった。「補完療法」に対して、州政府は専門家を養成し、健康保険も適用している。番組は、がん患者の痛みや不安をやわらげる「補完療法」に官民ともに取り組むドイツの現状をみていく。

475. 「ポツダム宣言・米ソの攻防①原爆投下・トルーマンの決断」〔2001

年7月25日・『そのとき歴史が動いた』・NHK・45分〕出演者：松平定知アナウンサー【出演者】仲晃(桜美林大学名誉教授)元共同通信社ワシントン支局長。現代アメリカ政治や日米関係論などを専門とする。ジャーナリストとしてボーン上田賞(1962年度)受賞。現在は桜美林大学名誉教授。著書に「ケネディはなぜ暗殺されたか」(NHK ブックス)「黙殺」等。訳書に「アイゼンハワー回顧録」「マクナマラ回顧録」等。

番組のねらい：

米英中三カ国代表のサインを一人で書き上げてしまった米大統領トルーマン。ポツダム宣言を急遽書き上げ、発表した背景には、「原爆実験成功」という切り札を手にしたトルーマンの太平洋戦争を「ソ連抜き」の「アメリカ単独」の勝利にしようという思惑があった。番組では「ソ連参戦」を求め続けたアメリカの外交政策が転換する中で、ポツダム宣言が変質していく過程を描き、日本の運命とその後の世界を規定した「ポツダム宣言発表」の意味を考える。

トルーマンの決断に対する番組のスタンス：

当番組は、原爆投下を正当化するものではない。アメリカの世論には「原爆投下によって戦争が終わり、本土上陸作戦をせずに済み、結果として多くの人命を救った」という意見が根強くあり、原爆の使用に特別の感情を持っている日本の世論とは大きく隔たりがある。今回の番組は、このアメリカ世論が形成されたプロセスのひとつであるトルーマンの決断を追うことで、終戦の切り札として原爆投下が本当に唯一の道だったのかということ再検証するものである。「原爆投下」が、いかに「ポツダム宣言の発表」と密接に関わっていたのかということに焦点を絞り、描いた番組。

476. 「ポツダム宣言・米ソの攻防②ソ連対日参戦・スターリンの焦燥」

〔2001年7月25日・『そのとき歴史が動いた』・NHK・45分〕出演者：松平定知アナウンサー【出演者】長谷川毅（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授。現代ロシア政治や日露関係史などを専門とする。主要著書「ロシア革命下のペトログラードの市民生活」「北方領土問題と日露関係」など。

番組のねらい：

日ソ中立条約を一方向的に破棄し、対日参戦の決定をしたソ連首相スターリン。そこにいたるスターリンの行動の多くは謎だった。しかし、このほど、ソ連側が作成したポツダム宣言の草案がロシア外務省外交史料館より発見された。日付は、アメリカがソ連抜きでポツダム宣言を急遽

発表したのと同じ7月26日。米英中三カ国だけでなく、ソ連も加えた四カ国で日本に無条件降伏を求める内容になっている。そこからは、連合国の一員として「対日参戦」の大義名分を得ようとしていたソ連側の焦燥が浮かんでくる。番組では、アメリカが突然発表したソ連抜きのパットン宣言に、ヤルタで交わした密約を反故(ほご)にされる恐れを感じ、対日参戦に踏み出すまでのスターリンの焦燥の日々を新資料で克明に追いながら、戦後の冷戦と北方領土問題など、日ロ間の確執の原点を描く。

その時：1945年8月8日 ソ連が日本に宣戦布告。

注：上記二つの番組については、当該のホームページにおいて、メディアの作る側の製作意図が明確に示されているので、その内容を直接引用した。

477. 「魔女の森に汽笛がひびく～ドイツ・ハルツ地方～」 [2001年8月28日・『煙はるかに世界SL紀行』・NHK・120分] 旅する人：池内紀 [ドイツ文学者]、菊池麻衣子 [女優]

ハルツ山地はドイツの中央部に位置するテューリンゲン地方にある。ここを貫いて走っているのが「ハルツ狭軌鉄道」(Harzer Schmalspurbahnen)。蒸気機関車が登っていくのは、伝説に包まれたブロッケン山(標高1,142m)の頂である。4月30日の夜にはブロッケン山に魔女たちが集まり、大集会を開くと言い伝えられている。子供の頃からSLの機関士となるのが夢であった池内氏は、今回SLの運転に挑戦しながら、蒸気機関車を支える人々との触れ合いを通じて、ドイツ文化の底流を探ろうとする。(SL=steam locomotive) ハルツの深い森には数々の伝説が隠されているが、なかでもよく知られているのが「魔女伝説」である。菊池は、この魔女伝説を深く知りたいと思い、池内とともにSLに乗りハルツ山地の奥深く分け入っていく。ハルツ地方の中心都市ヴェルニゲローデ(Wernigerode)は、中世以来木材の集散地と繁栄してきた人口3万7千人の静かな町である。旧東ドイツの中でも、中世の町並みがよく保存されていることで知られている。ヴェルニゲローデ駅を基点として、ブ

ロッケン山へ登山鉄道がつながっている。町や村を結んで走る路線の総延長は130キロに及ぶ。ドイツ分断の時代、西ドイツ側では効率化が進みSLが急速に姿を消していったが、東ドイツ側では、SLは人々の大切な交通手段として大事にされてきたという経緯がある。皮肉な見方をすれば、東西分断の歴史がSLの保存にプラスに働いたということになるだろう。ブロッケン山山岳鉄道の開通は1898年で、ドイツではイギリスに遅れた産業革命が進行中であった。東西ドイツ統一後、ハルツ地方は、ドイツではめずらしい山岳地帯として、多くの観光客を引き寄せて、深い森には今日も蒸気機関車の汽笛がこだまする。

⇒関連映像資料：457.「魔女の森の夜祭り～ドイツ・シールケ～」〔2001年2月16日・BS2〕〈本稿59ページ参照〉

⇒関連映像資料：200.「ヨーロッパ冬物語・下を出せ 愚者たちの祭典～ドイツ・ウルム市～」〔1997年2月27日・BS2〕〔『法政理論』第35巻第4号(2003年)参照〕

⇒関連映像資料：307.「ランメルスベルク旧鉱山と古都ゴスラー」〔1999年7月18日・『世界遺産』・BSN・30分〕〔『法政理論』第36巻第34号(2004年)参照〕

478.「ベートーベンの探求」〔2001年9月1日・BS2・50分×2〕

番組の進行役は、ザルツブルク音楽祭ディレクターであるハンス・ランデスマン。彼は、冒頭で「ベートーベンの音楽が、20世紀にどのように解釈され演奏されてきたか、というテーマについて、ザルツブルク音楽祭を訪れた指揮者や演奏家を通してさぐりたい」と述べている。番組は4部構成で、指揮者や演奏家がベートーベンの作品の解釈を通しながら、個々のベートーベン観を語っていく。中でもロリン・マゼールの次の言葉は、音楽芸術のありようを的確に言い当てていて興味深いものがある。「音楽を言葉で表すことはできない。だから、我々が音楽について語ろうとすると、そこにはつねに壁がある。われわれは言葉を使って音楽に近いものは言い表せても、音楽そのものを語ることはできない。

だから、我々には音楽が必要である」。番組に登場する3人の指揮者：リカルド・ムーティ、ロジャー・ノリントン、ロリン・マゼール、そしてバイオリニストのフランク・ペーター・ツインマーマン。

479.-482. 「ナチスと戦ったスパイ～イギリス・SOE 作戦員～<1>初めての大作戦<2>工作活動の舞台裏<3>不屈のスパイ魂<4>連合軍勝利の陰で」〔2001年9月6～9日・『BS世界のドキュメンタリー』BS1、制作：BBC、イギリス 2000年 50分×4〕

言うまでもないことであるが、古今東西、およそ戦争はただ単純に武力・軍事力の優劣だけで決着するものではない。第二次世界大戦においては、当初優勢であったナチス・ドイツの軍事力に対してさまざまな対抗手段が用いられた。この番組は、ヨーロッパの戦場において、ゲリラ的な破壊活動や諜報戦に携わった数多くの秘密工作員たちの戦時下における生き様が紹介される。SOEとはSpecial Operations Executiveの略。番組は、当時のSOE作戦員の数少ない生還者の証言インタビュー・記録映像そして再現映像で構成される。番組で紹介される主な内容：ナチスドイツ占領下におけるフランス・レジスタンス活動への支援、ドイツ占領下のノルウェーにおける原爆開発の阻止。バルカン半島におけるパルチザン支援活動、ノルマンジー上陸作戦に向けての後方かく乱活動。鉄道・発電所の破壊活動。なお、第二次世界大戦下におけるSOE作戦員達の地道な活躍を描いた映画は、1960年代以降、数多く作られている。そのいくつかを紹介しておくことにする。

⇒関連映像資料：483. 「ナバロンの要塞」<The Guns Of Navarone, 1961・米・144分>アリスティア・マクリーンの戦争小説の映画化作品。1943年第二次世界大戦中、連合軍はギリシアのケーロス島の南の小島ナバロンにある、ドイツ軍の巨大な大砲を爆破計画を立てた。一見、不可能とも思える難攻不落の要塞島爆破のため、6人の特殊作戦員が選ばれる。トンプソン監督は、特殊作戦員たちが目的を果たすまでのドラマを、ダイナミックな演出で描いた。とりわけ目的に到達するまでの地理的・

時間的問題を提示するくだりは説得力があり、映画自体の緊迫感を盛り上げ、さながらセミ・ドキュメンタリーのような構成力を前面に押し出している。〈アカデミー特撮効果賞受賞〉

⇒関連映像資料：484. 「テレマークの要塞」〈The Heroes Of Telemark, 1965, 1965・米・131分〉ナチス・ドイツの原爆開発を阻止するために、重水素酸化物製造工場を破壊した、ノルウェーのレジスタンスたちの実生活を映画化したもの。この作品もドキュメンタリー色が強く出され、戦争映画が単なる娯楽として提示されるとは限らないことを示す一作と言える。

ここで紹介した2本のハリウッド戦争映画は、アクション本位の単なる娯楽映画にとどまらない、丁寧な映像作りの例としても評価されるが、それはあくまでもドキュメンタリー・タッチという手法を効果的に用いたに過ぎず、一定のリアリティは保証されつつも、我々はあくまでも俳優によって演じられた劇映画(ドラマ)としてのストーリー展開を楽しむことが出できた。だが、しかし……

9月11日 ニューヨーク同時多発テロ(グランド・ゼロ)

映像メディアの発達により、世界がいかに劇場化したとはいえ、深夜のテレビで繰り返し放映されたあのシーン、ニューヨーク貿易センターの双子ビルに、不気味な静寂感を伴いつつ、狙いすましたかのようにジェット旅客機が突入し、ビルが炎と煙に包まれる映像は、「ツクリモノ」の映画、つまり作り手の意図に基づいて演出され、演じられた映画以上に「あまりにも映画的」であり、眼前の映像を見るわれわれの視線が、その映像を現実にしたこととして了解し、冷徹なニュース映像であることを受け入れるまでに、しばらく時間を要した。そしてこの出来事は、「ツクリモノ」としての映画をはるかに超えてしまう圧倒的な印象と衝撃をもって、我々の脳裏に深く刻み込まれた。それは同時に、現実と虚

構、ノンフィクションとフィクションの境界領域を溶解させてしまうという形での、映像メディアに対する我々の既成の価値観をも崩壊させるテロリズムでもあった。

485. 「ケルン大聖堂 (ドイツ)」 [2001年9月16日・『世界遺産』第267回・BSN<TBS 系列>・30分]

ケルン大聖堂の建設は、1248年に着工したが、1560年に資金難などの理由で工事は一時中断された。そして300年あまりの空白の後、1880年によようやく建設工事は終了した。完成までに600年余りの歳月がかかったことになる。中断した工事の再開のきっかけとなったのが、長い間行方不明になっていた、西側双塔部分の設計図の発見だった。1814年のことである。工事中断の空白が逆に純粋なゴシック様式の大聖堂を残すことにつながったともいえる。双塔の高さは150メートルを越える。ケルン大聖堂は、1万平方メートルに及ぶステンドグラスに飾られている。12世紀に始まったゴシック様式の建設技法は、大聖堂内に窓を大きく作ることを可能にし、荘厳な宗教空間を演出していった。内陣の奥に置かれた聖遺物を安置した聖棺。12世紀にケルンにもたらされた『東方三博士』の遺骨がケルン大聖堂の聖遺物である。この聖遺物がケルン大聖堂の存在をヨーロッパ中に知らしめたのである。

⇒関連映像資料：232. 「ケルン大聖堂の涙～酸性雨被害からの再生」

[1998年3月8日・『素敵な宇宙船地球号』第37回・NT21・製作：テレビ朝日] <『法政理論』第36巻第2号(2003) p.16-17. 参照>

486. 「北欧の十字路～バルト海世界の形成～」 [2001年9月24日・『教育セミナー・歴史で見る世界』・ETV・30分]

北の地中海とも言われる「バルト海」はドイツ語で「東海 (Ostsee)」と呼ばれる。長らくヨーロッパの海上貿易の主要な舞台であっただけでなく、中世には、ノルマン人、ドイツ人、ポーランド人などが攻防を繰り返り広げ、北欧・東欧・西欧が交わる交差点でもった。番組では、ヨーロッパの北の内海に成立した、歴史的世界としてのバルト海域を展望す

る。バルト海は、西側をスウェーデンとデンマークに、北東をフィンランドに、東はロシアとバルト三国(ラトビア・エストニア・リトアニア)に、そして南はポーランドとドイツに囲まれている。これらの国々を見ただけでも、この海が言語・文化的背景の異なるさまざまな人々の攻防の舞台であったことがうかがわれる。バルト海域の西部と南部を形成したのは、広い意味でのゲルマン民族である。中でも北ゲルマンのノルマン人は、中世初期からスカンディナヴィア半島とデンマークに居住し、バルト海貿易の先駆者となった。ノルマン人が建国したデンマーク、ノルウェー、スウェーデンのうち中世に最も力を誇ったのはデンマークである。12世紀になると、ドイツ西部からドイツ人が大量にバルト海沿岸に入植し始めた。この移住は、異境の地をキリスト教化するという目的を掲げた騎士団に先導されていた。地中海の十字軍に触発されたドイツ騎士団という、いわば「北の十字軍」は、プロイセンやリヴォニアをゲルマン世界に組み入れた。入植したドイツ人は、バルト海の出口にリューベックを建設し、本格的な交易に乗り出す。リューベックを盟主として、14世紀に始まる北ドイツ都市同盟『ハンザ』は、バルト海域のドイツ化を象徴するもので、以後北ヨーロッパ世界の生活・文化に少なからぬ影響を及ぼしていく。

⇒関連映像資料：487. 「アレクサンドル・ネフスキー」

<1938年・ソ連>監督・脚本：セルゲイ・M・エイゼンシュテイン。プロコフィエフの音楽を使って戦闘シーンを音楽の盛り上がりと連動するように映像をモンタージュした実験的作品。監督のエイゼンシュテインは、音楽と映像の相関性を初めて理論的に実践し、この歴史的スペクタクルを作り上げた。映画は、13世紀末に実在したアレクサンドル・ネフスキー将軍が、豊富な資源に恵まれたロシアの経済的利権を獲得しようとするスウェーデン軍やドイツ騎士団を勇猛果敢に粉碎し、祖国の危機を救うというさまを描いている。製作当時ソ連とナチス・ドイツは武力衝突の緊張関係にあり、ソ連の指導者スターリンは、自らをネフスキ

ーになぞらえて英雄的イメージを創出しようとした、あからさまな政治的プロパガンダ映画であるという評価もこの映画にはある。

489. 「ぼく一生の不覚～三国同盟締結・松岡洋右の誤算～」〔2001年9月26日『そのとき歴史が動いた』・NHK・45分〕出演者：松平定知（アナウンサー）、出演者：五百旗頭真氏（スタジオ出演、神戸大学教授・日本政治外交史）著書に、『日本の近代6 戦争・占領・講和』（中央公論新社）『検証・歴史を変えた事件』（共著、TBSブリタニカ）など多数。・加瀬俊一氏（VTR出演、外交評論家）

その時 1940年9月27日午後1時15分 日独伊三国同盟が締結される
番組のあらすじ：ヨーロッパで第二次世界大戦が始まって1年後、日本はヒトラー率いるドイツ、ムッソリーニ率いるイタリアと軍事同盟を結んだ。この後日米関係は破局への道をたどり、翌年開戦に至る。日本はなぜ、アメリカと対立し仮想敵国とする同盟を結んだのか。この同盟締結に中心的役割を果たしたのは、当時の外務大臣・松岡洋右。アメリカ西海岸で青春時代を過ごした松岡は、「アメリカ相手には力を見せつけることが肝要」と考えた。松岡は、反対派の説得を行い、ドイツとの秘密交渉を進めた。松岡が作成した極秘史料には、松岡がソ連をも同盟に加えた4国協商によってアメリカに対抗しようとした構想が記されている。しかしその構想はやがて破綻し、日本は破滅への道を進むことになる。日独伊三国同盟の締結に秘められた松岡の思いと、日本の運命を変えた瞬間を描く。

490. 「ベルリン国際マラソン・生中継番組」〔2001年9月30日・NST・新潟総合テレビ<フジテレビ系列>・3時間〕

日本の若手トップアスリート高橋尚子は、この日のマラソンで女子のマラソン最高記録を打ち立てるといふ快挙を成し遂げたが、勝利の美酒に酔いしれる間もなく、わずか二週間後その輝かしい記録はあっさりと塗り替えられてしまった。

491. 「ベルリン疾走・無敵の車椅子レーサー」〔2001年10月14日・『情熱

大陸』・BSN<TBS 系列>・30分]

9月30日、ベルリン国際マラソンの当日、42.195キロを車椅子で走る過酷なレースに挑もうとしているのは、車椅子マラソン日本最高記録保持者である廣道純(ひろみちじゅん・27歳)である。車椅子マラソンは、通常のマラソンの50分前にスタートする。スタート地点はベルリンの西地区でもあるシャルロテンブルク、この日は140人が参加した。廣道は、神戸市から大分県の日出(ひじ)町に移り住んで2年、地元の自動車部品メーカーで働いている。15歳のときに事故で脊髄を損傷、以後車椅子の生活をより前向きに生きるためマラソンに挑戦、2000年のシドニー・パラリンピック800メートルで銀メダルを獲得、それにさかのぼること4年前の1996年大分国際車椅子マラソンでは、日本人最高の2位に入る。そして、このときの優勝者スイスのハインツ・フライのもとを訪ね、直接の指導を受けたりした。廣道が初めての海外参加ともなるベルリン車椅子マラソンに参加したのは、1994年、このときは路面の悪さにタイヤがパンクし惨敗した。そして今回は雪辱を期しての参加でもある。スタートの直前、参加者のハインツ・フライは廣道に視線を投げかけ、そして「今回のライバルは誰でしょうか」というインタビュアーの問いかけにこう応じる。「今年の世界陸上で好成績を挙げた廣道選手ではないでしょうか」。廣道はフライからの挑戦状を受け取った。号砲一発、いよいよベルリンの路上で車椅子の90分の過酷な戦いが始まる。

492. 「ドリーム・オン・ステージ/タカラジェンヌ・イン・ベルリン」
[2001年10月19日・BS2・120分]

「宝塚ベルリン公演」は、2001年6月24日から7月7日まで、ベルリンのフリードリヒシュタットパラスト(FSP)で行われた。宝塚歌劇団は、第二次世界大戦前に一度ベルリンを訪れたことがある。かつての「塚ガール」たちが一生懸命に稽古をしていた1938年11月9日のベルリンで、彼女たちは「水晶の夜」事件に遭遇。稽古場の前にあったシナゴーグでも放火騒ぎがあったという。

⇒関連映像資料：455. 「ブルナー・最後のナチス」〔本稿57ページ参照〕

493. 「恋に生きた天使 マレーネ・ディートリッヒ」〔2001年10月22日・『夢伝説・世紀の主役たち』・NHK・45分〕

「百万ドルの脚線美」で世界を魅了した女優マレーネ・ディートリッヒ。破天荒に生きた彼女の生涯を振り返る。ドイツ生まれの彼女が、キャバレーの踊り子からハリウッドを代表する大女優に成長するにいたった裏側には、スタンバーグ監督との劇的な出会いと恋物語があった。第二次世界大戦中は祖国ドイツのヒトラーに反旗を翻し、生涯の愛唱歌「リリー・マルレーン」でアメリカ兵の慰労に尽くした。戦後も精力的に活動し、70歳を過ぎても世界を飛び回った。その一方、私生活では自由奔放な恋の遍歴を重ねた。自らの信じる道を生きたディートリッヒ。実の娘が赤裸々に語る。ゲストには、番組のナレーションを担当しているピーター、ナビゲーターには映画監督の篠田正浩を迎え、今なお輝きを失わないディートリッヒの魅力について熱く語り合う。

⇒関連映像資料：418. 「花はどこへ行った～静かなる祈りの反戦歌～」

〔2000年12月5日・『世紀を刻んだ歌』・BS2・75分〕ナビゲーター：小林克也。＜『法政理論』第37巻第1号(2004) p.92-94. 参照＞

⇒関連映像資料：376. 「リリー・マルレーン残照」〔2000年5月14日・『世界・わが心の旅』・BS2・45分〕＜『法政理論』第37巻第1号(2004) p.60. 参照＞

494. 「日本を愛したアインシュタイン～その悲劇」〔2001年10月17日『その時歴史が動いた』・NHK・45分〕出演者：松平定知アナウンサー【出演者】・池内了(いけうち・さとる)宇宙物理学者・名古屋大学教授、相対性理論に詳しく、宇宙物理に関する著書多数。また原子力の問題にも関心をよせ、その著書も多数ある。

その時：1946年5月23日、アインシュタインが原子力科学者緊急委員会の委員長として核兵器の使用に反対する声明文を発表した日。

番組のあらすじ：20世紀を代表する科学者アインシュタインは日本を深く愛し、日本に友人も多くいた。1945年8月、広島と長崎に原子爆弾が投下されたことは、アインシュタインに衝撃を与えた。彼は「人類は科学をコントロールしなくてはならない」という平和運動への第一歩を踏み出すことになる。相対性理論の生みの親でもあるアインシュタインは、祖国ドイツでナチスが台頭し、ユダヤ人の迫害が始まるとアメリカに亡命する。やがてナチス打倒のためには軍事力行使もやむなしと考え、アメリカに原子爆弾の開発を促す手紙に署名してしまう。やがてドイツは第二次世界大戦に敗北、原子爆弾は日本に投下された。その知らせに悲しんだアインシュタインは、科学を平和目的にのみ使うべきだと訴え、世界に核兵器廃絶運動を巻き起こしていく。番組では、アインシュタインと日本とを結ぶ逸話を紹介しながら、彼の決断が科学のコントロールという人類的テーマの先駆けとなった時を描く。番組で紹介されるチェコ共和国のテレージェンシュタット強制収容所にはアインシュタインの二人の従姉妹（リナ・アインシュタイン、ベルタ・ドレフュス）が移送された。一人は到着間もなく死亡、もう一人はアウシュビッツ強制収容所に送られたまま行方不明である。

⇒関連映像資料：432. 「アインシュタインの苦悩～第二次大戦と原爆開発～」〈本稿39ページ参照〉

495. 「スペシャリスト～自覚なき殺戮者～」〔2001年10月24日・WOWOW・145分〕

第二次世界大戦中に「ユダヤ人移送計画」の責任者としてユダヤ人を強制収容所に送り込んだナチス戦犯アドルフ・アイヒマンが1961年にイスラエルのエルサレム地方裁判所で裁かれた記録映像を再構成して製作され長編ドキュメンタリー映画である。1960年、アイヒマンがアルゼンチンに潜伏していたところをイスラエルの国家機関が捕らえ、アルゼンチンの国内法を破ってひそかに拉致、イスラエルに連行して裁判が行われた。世界中から注目を浴び、日本からも作家の開高健氏が取材に出か

けている。脚本を手がけたのは「国境なき医師団」の元総裁であったロニー・ブローマンとエイアル・シヴァン (監督・制作)。彼らはユダヤ系ドイツ人哲学者で後にアメリカに帰化したハンナ・アーレントが『イスラエルのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告』(邦訳 みすず書房)で提起した問題に啓発を受けて350時間に及ぶ未公開フィルムの編集を思い立ったという。アーレントの著書は、アイヒマン裁判の膨張記録であり、その内容は当時大論争を巻き起こした。アーレントは、アイヒマンを小心な凡人、従順な下級官僚にすぎないとして、ユダヤ人社会から反感を買った。戦争犯罪者が自分の行為を追及されて「命令でやっただけ」「自分の単独の判断ではない」と自己弁護するのはいわば常套手段である。最近、日本で特に目立つ事件として企業ぐるみの犯罪が指摘できる。例えば食品の「不当表示」、東電の原発事故にみられるトラブル隠し、不当な価格操作など、企業の利益第一主義のなりふりのかまわなさは、枚挙に暇 (いとま) がない。そしてそこには何らかの意思決定を行う「上司」がいて、その命令に無自覚に従うことにより企業という名の組織に忠誠を示そうとする下級官僚や、平社員がいる。彼らはアイヒマンと同様。凡庸なのか、無自覚なのか、問題の性質こそ異なれ、組織犯罪として同質である。アイヒマンの戦争犯罪関与と、アイヒマン裁判の詳細については、以下の関連映像資料を参照のこと。

⇒関連映像資料：「アイヒマン裁判と現代」〔2000年1月31日・ETV・45分〕＜『法政理論』第37巻第1号(2004) p.43-44. 参照＞

⇒関連映像資料：403. 「ヒトラーの側近たちⅡ(1)アドルフ・アイヒマン・平凡な公僕の大罪」〔2000年9月22日・ETV・45分〕＜『法政理論』第37巻第1号(2004) p.80. 参照＞

⇒関連映像資料：294. 「ナチ・ハンター～アイヒマンを追い詰めた男～」〔1999年5月24日・ETV・90分〕＜『法政理論』第36巻第3・4号(2004) p.278-280. 参照＞

⇒関連映像資料：「コンスピラシー・アウシュビッツの黒幕」〔2003年

10月18日・WOWWOW、”Conspiracy”, 2001年・英米) <注>詳細は、2003年版の原稿で扱う予定。

⇒関連映像資料：「言葉～アイヒマンを捕らえた男たち～」〔2003年2月18日・BS2・150分〕 <注>詳細は、2003年版の原稿で扱う予定。

496. 「グリム童話と女性たち～メルヘン幻想紀行～」〔2001年10月27日・『地球に好奇心』・BS2・75分〕

「赤頭巾」や「白雪姫」「ヘンゼルとグレーテル」「ブレーメンの音楽隊」。1882年に初めて刊行されて以来、世界中の人から親しまれてきた『グリム童話集』は、ヤーコブとヴィルヘルムのグリム兄弟がドイツ各地で聞き書きした民話や伝承がもとになっている。作品には、グリム兄弟の育った家庭環境や時代背景が深くかかわっている。さらに、何人もの女性の存在が大きく影響していることが最近の研究からわかってきた。番組では、二人の故郷ハーナウから、多くの童話の舞台となったブレーメンまで、兄弟にゆかりの地を訪ねる。兄弟が幼年期を過ごしたシュタイナウの旧居、カッセルのグリム博物館、童話にちなんだ銅像のある街、兄弟が教鞭をとったゲッティンゲン大学、ドイツ語辞典を編纂したドイツ語辞典編纂所などを訪ねながら、グリム兄弟の素顔を探り、童話成立の経緯を解き明かしていく。

⇒関連映像資料：457. 「魔女の森の夜祭り～ドイツ・シールケ～」〔2001年2月16日・「地球の街角」・NHK・30分〕 <本稿59ページ参照>

497. 「続・エンデの遺言 第一部：地域通貨の希望 第二部：銀行の未来」〔2001年11月25日・BS1・110分〕

環境や人権など、様々な活動に積極的に関わってきた音楽家の坂本龍一は、2年前に、ドイツのファンタジー作家ミヒャエル・エンデが死の前にして残した一つのメッセージに出会った。エンデは次のように語った。「重要なポイントは、たとえば、パン屋でパンを買う購入代金としてのお金と、株式市場で扱われる資本としてのお金は、二つの異なった種類のお金であるという認識である」。1995年5月、NHKは「エンデ

の遺言～根源からお金を問う～」を放送した。エンデは、亡くなる前にNHKにある提案を持ち込んでいた。環境・貧困・精神の荒廃など、現代の様々な課題の根源にお金の問題が潜んでいると言うものである。番組は、エンデのメッセージを手がかりに、その意味を読み解いていこうというものであった。世界恐慌の嵐が吹き荒れた1920年代は、資本主義の危機の時代であった。その中でヨーロッパやアメリカでは、限られた地域だけで通用する「地域通貨」を発行し、その危機を乗り越えようとする試みが起きた。エンデは、このもう一つのお金にも注目し、現代の金融システムが抱える問題を根本から問いかけた。番組では、お金を機能を「交換」にだけ限定した世界各地の地域通貨の取り組みを丁寧に紹介している。地域通貨は、地域経済を活性化したり、コミュニティーの新たなつながりを生み出す媒体ともいえる。欧米では、ローカル通貨、コミュニティー・マネーなどとも呼ばれ、現代世界中でおよそ3000の地域通貨が用いられていると言う。1995年の番組が放送されると、その直後から様々な市民団体や行政などの問い合わせが相次いだ。国が発行する通貨とは全く別の地域通貨の存在とその可能性に多くの日本人が注目したのである。時はまさにバブル崩壊の失われた10年の時期でもある。今回の続編では、坂本を番組の案内人として、日本全国で起きつつある「地域通貨ムーヴメント」が紹介されていく。番組は、まず地域通貨の代名詞ともなった「西千葉」の地域通貨『ピーナッツ』の紹介から始まる。

⇒関連映像資料：285. 「M・エンデの遺言～根源からお金を問う～」
〔1999年5月4日・BS2〕 <『法政理論』第36巻第3号 (2004) p.
20-22. 参照>

498. 「心を結ぶ地域通貨」〔2001年12月5日・『クローズアップ現代』・NHK・25分〕

今、全国各地で、限定された地域だけで流通する新しいお金として地域通貨が生まれている。千葉県では、大型スーパーの進出で売上が落ち

込む商店街が、買い物客を取り戻そうと地域通貨を導入した。また、北海道・栗山町では、高齢化が進む中、介護保険でカバーできないサービスを補うため地域通貨を導入した。「足が悪いので買い物をして」「窓拭き、庭の草取り、雪かき」といった高齢者の要望をかなえると、地域通貨を受け取る。地域通貨が流通することによって、高齢者は子どもに昔話をしたり、昔ながらの生活の知恵を教える等、世代間の交流も生まれ始めた。東京・渋谷では、企業、環境 NPO が参加して新しい商業圏を作るという新たな試みも始まった。人間関係の変化や不況の中で、急速に広がる地域通貨の背景を追う。(NO. 1513)

499. 「狂牛病・信頼をどう取り戻すのか」 [2001年12月6日・『クローズアップ現代』・NHK・25分]

牛の全頭検査が始まってから1か月あまり。2頭目、3頭目の狂牛病の牛があいついで発見された。小売店、スーパー、生産者、それぞれの場で消費回復のための模索が始まった矢先のことだった。去年、牛肉消費低迷に苦しんだ欧州では、店頭のパック詰め肉に添付されたバーコードから牛まで瞬時にたどれるシステムを導入するなど、徹底した牛肉の管理と情報公開を行い、消費者の信頼を取り戻すことに成功しつつある。先進地欧州の経験を参考に、いま日本が何をしなければならないのか考える。(NO. 1515) スタジオ出演：谷田部雅嗣 (NHK 解説委員) 味田村太郎 (NHK 科学文化部記者)。

●牛肉の安全性について<厚生労働省ホームページより>英国での実験・研究の結果、脳、脊髄、眼及び回腸遠位部 (小腸の最後の部分) 以外のところから狂牛病の感染はなく、牛乳、乳製品からも感染はないとされている。また、「国際獣疫事務局」(OIE) の基準でも、牛肉は危険部位ではないとされている。狂牛病について：1986年に初めて英国で報告された牛の病気。脳の組織がスポンジ状になり、運動失調などの神経症状を起こす。潜伏期間は2～8年で、発症後2週間から6カ月で死亡するとされている。「プリオン」というたんぱく質が異常化して、感染す

るとされている。経口で感染し、感染牛の脳や脊髄（せきずい）などを含んだ飼料が原因と考えられている。人への感染について：人間の痴呆症の一つである「新型クロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）」は、狂牛病の牛から感染した疑いが強いと指摘されている。痴呆と歩行障害が急速に進み、運動・思考能力を失う。発症から1～2年で死に至る。感染は、狂牛病に感染した牛の骨髄や臓器などを口にした場合だと考えられているが、詳しいことはわかってない。どの程度食べれば発病するかなども不明。日本では、狂牛病の牛から感染したと見られる「新型クロイツフェルト・ヤコブ病」はまだ見つかっていない。肉骨粉について：肉骨粉は、肉牛などを解体した際に、筋肉など食べる部分を除いた残りの内臓や皮、骨などをまとめて化学処理し、たんぱく質だけを取り出して作った飼料のこと。それ自体に毒性はない。ただ、狂牛病の牛の脳などが原料として使われると、感染力を持ち、他の牛が食べると、狂牛病を発病することがある。日本も一時的に製造や販売、使用を禁止した。

500. 「ベートーヴェン・謎の恋人～楽聖を変えたボヘミアの夏～」〔2001年12月22日・『地球に好奇心』・BS2・75分〕

クラシック音楽の巨匠ベートーベンの亡くなった翌日、本人直筆の恋文が発見された。。その手紙に宛名は記されていなかったが、「不滅の恋人」と呼びかけている。この手紙が書かれたのは、ベートーベンが41歳の夏（1812年）、ウィーンを出発しボヘミアを目指して旅をした時のことである。生涯で最後の恋愛は、後の作品に大きな影響を与えたと言われる。「不滅の恋人」とはいったい誰なのか。「不滅の恋人」に送ったはずの手紙をベートーベンはなぜ手元に残しておいたのか。番組は、結局「不滅の恋人」と結ばれることはなかったベートーベンのボヘミア旅行の足跡をたどる。ボンの「ベートーベンハウス」館長のミヒャエル・ラーデンプルガーさんは番組の中で次のように語っている。「ベートーベンは耳の病や、女性問題などでいつも悩んでいました。彼の人生は次々と起こる困難を克服していくことの繰り返しでした。そのたびにベートー

ーベンは、一時の感情に押し流されそうになる自分に打ち勝とうとしたのです。ベートーベンは困難を受け入れることで自己を作り上げていった人です。中でも「不滅の恋人」との恋愛は、彼の人生に大きな影響を与えました」。このお出来事以後の彼は二度と恋愛をすることはなく、その音楽はより深く、そして人間の内面の探求へと向かっていくことになる。評論家の青木やよひさんは、40年にわたりベートーベンの「不滅の恋人」について調査研究のため、たびたびボヘミアを訪れ、謎を解く手がかりを捜し求めてきた。ベートーベンの人間像と音楽を理解する鍵は、恋人とのドラマの中にあると青木さんは考えている。

⇒関連映像資料：

501. 「不滅の恋 ベートーヴェン」 ("Immortal Beloved", 1994年・アメリカ) 監督：バーナード・ローズ、出演：ゲイリー・オールドマン、イザベラ・ロッセリーニ、ヨハンナ・テア・ステージ、ジェローン・クラッペ。

楽聖ベートーヴェンの遺書に記された「不滅の恋人」とは誰だったのか。今日なお謎とされる音楽史上のミステリーを軸に、大作曲家の愛と波乱の生涯を描いた音楽伝記映画。フランシス・コッポラの「ドラキュラ」や「レオン」などで強烈な個性を放ったゲイリー・オールドマンが、激情家として知られたベートーヴェンに扮し、大胆かつ繊細な演技で孤高の芸術家の内面に迫る。ゲオルグ・ショルティ指揮のロンドン交響楽団や、ヨーヨー・マ、エマニュエル・アックス、マレイ・ペライアら一流演奏家の新録音による名曲が全編を彩る。ストーリー：1827年、ベートーヴェン（オールドマン）が世を去った。彼の遺書には、「全財産・楽譜を不滅の恋人にささげる」とあったが、弟子のシンドラ（クラッペ）は、「不滅の恋人」探しを始め、かつてベートーヴェンがピアノを伯爵夫人ジュリエッタ（ゴリノ）、ピアノ協奏曲第五番「皇帝」の初演で彼を観客の失笑から救った伯爵夫人アンナ・マリー（ロッセリーニ）と会う。やがてベートーヴェンが弟カ

スパールとその妻ヨハンナ (テア・ステージェ) に対し、屈折した愛情を抱いていたことが明らかになる。なお、アンナ・マリー役のイザベラ・ロッセリーニは、往年の名女優イングリッド・バーグマンの娘である。

502. 「北海の郵便配達夫」 [2001年12月26日『ヨーロッパライフ』・BS1・20分]

ドイツ北部のバルト海沿岸に位置するハリゲン諸島。ここは遠浅の海にいくつかの島が点在する。主な島は、ランゲネス島、グルーデ島そしてオーランド島。肥沃な湿原が広がる島々に人々が住み着いたのは14世紀のことである。低地のため、土を盛って作られた小高い丘の上に住居が建てられている。番組の主人公フィーデ・ニッセンさん (52歳、1948年生まれ) は、これらの島々を結ぶ郵便配達夫である。彼は満潮の日は船に乗り、そして干潮を狙っては、島々を結ぶ海面すれすれに走るトロッコに乗って毎日郵便物を配達して回る。番組の最後に彼は次のように語っている。「どんなにメディアが発達しても、私の仕事はなくならないでしょう。Eメールの普及で郵便の数は減りました。しかし、メールでは送れないものもあります。たとえば、新聞や小包です。私の仕事は続きますよ。郵便を受け取る人が喜び、私の仕事を理解してくれれば幸せです。郵便配達は、素晴らしい仕事ですよ」。

おわりに、そして郵便配達夫フィーデ・ニッセンさんへのオマージュとして

かつて、手紙といえば、手書きの草稿を作り、しかも目上の人にはワープロでは失礼に当たると勝手に思い込み、わざわざカナクギ流の手書きでしたためたりして、時には気の利いたふりをして記念切手を何枚も貼り付けて投函した。返事を待つこと数日、あるいは数週間。そうした間延びした時間は、当時無意味と感じていただろうか。もちろん、事務的に期限が迫る事柄では、間に合うかどうかかなり焦燥感に襲われていたことも明確に記憶している。いらいらしながら返事を待ったこともある。だが、無意味ではなかった。なぜなら、何かを待つ時間、自分はきちんと生きられていたからである。今は情報の相互のやりとりは速い。インターネットは文句なしに便利である。情報は欲しければすぐ手に入る商品の一つとなったが、インターネットの情報には、何か質感を感じない。つまり、重さを感じない。そうこうする間に筆者を含めて、どうやら多くの人々は「待つこと」そして「待つこと」に関わる悲哀や喜びというメリハリのある感性も失ってしまったらしい。かつてフィーデさんは、トロッコで配達中に海の真ん中で天候の急変に遭遇。体は海水につかりながらも、必死で押しながら、命からがら島にたどりついたこともあるという。仕事を忠実にこなそうとする勤勉なドイツ人の典型を見る思いがする。そこには、できるだけ楽をして金を儲けようという拝金主義の姿は皆無である。今日本では、「仕事」をめぐる価値観が揺れにゆれている。ただ、フランス語で「仕事」を意味する「トラヴァーユ (travail)」が語源的に「苦痛」を意味し、そしてドイツ語で「仕事」を意味する「ベルーフ (der Beruf)」が語源的に「天職」を意味しているということは、示唆的である。

参考文献

- 吉田 和比古「ハイパーテキストとしての『言語』と『映像』」『新潟大学教養部研究紀要』第25集 65-77ページ 1993年。
- 吉田 和比古「都市の記号論～ベルリン・二項対立の首都再生～」『新潟大学言語文化研究』〔新潟大学人文学部・法学部・経済学部 第2号 1-14ページ、1996年。
- 吉田 和比古「メディア、あるいはファシズム (1)レニ・リーフェンシュタール論～」『法政理論』新潟大学法学会 第30巻 第2号 p. 1-27ページ 1997年。
- 吉田 和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(1)ドイツ戦後史の映像レファレンス～」『法政理論』新潟大学法学会 第33巻 第2号 p. 66-150. 2001年。
- 吉田 和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(2)過去をまなごしつつ、統一後の新たな再生へ向かって～」『法政理論』新潟大学法学会 第34巻 第1/2号 p.22-61. 2001年。
- 吉田 和比古「都市の記号論(2)ベルリン：日本のマスメディアのまなごし～」『新潟大学言語文化研究』〔新潟大学人文学部・法学部・経済学部 第8号 p.167-180、2002年。
- 吉田 和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(3)過去の映像は未来を予見する～」『法政理論』新潟大学法学会 第35巻 第4号 p.145-193. 2003年。
- 吉田 和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(4)1998年：ICEは凍りついた～」『法政理論』新潟大学法学会 第36巻 第2号 p. 1-46. 2003年。
- 吉田 和比古「展開科目としての『現代都市論』の映像資料アーカイブズ(2)～教育コンセプトの再構築のために～」『大学教育研究年報』第9号 p. 1-12. 2004年。
- 吉田 和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(5)1999年：「ベルリンの壁」崩壊から10年～」『法政理論』新潟大学法学会 第36巻 第3・4号 p. 1-67ページ 2003年。
- 吉田 和比古「ドイツ社会文化論としてのビデオ・アーカイブズ～(6)2000年：「戦争の新たな世紀」『法政理論』新潟大学法学会 第37巻 第1号 p.36-101 2004年。